

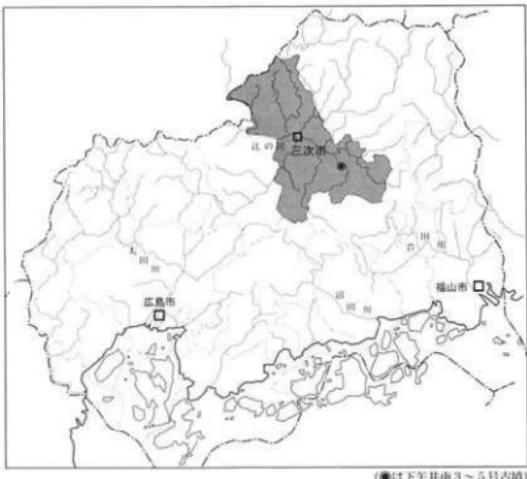
中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(34)

下矢井南第3～5号古墳

2014

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(34)

下矢井南第3～5号古墳



(●は下矢井南3～5号古墳)

2014

公益財団法人 広島県教育事業団



a 下矢井南第3～5号古墳 遠景（東上空から）



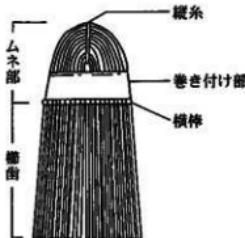
b 下矢井第3～5号古墳 近景（西上空から）



c 筒形石製品

例　　言

- 1 本書は、平成19（2007）年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う下矢井南第3～5号古墳（三次市吉舎町矢井及び敷地所在）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により、公益財団法人広島県教育事業団（平成25年4月1日付けで財団法人から移行）が実施した。
- 3 発掘調査は調査研究員の渡邊昭人（現・広島県教育委員会文化財課）が担当し、株式会社埋蔵文化財サポートシステムの調査員である島内浩輔・宇田員将・松浦智が支援業務（発掘調査に係る発掘及び記録作業）を行なった。
- 4 出土遺物及び図面の整理は、渡邊を中心に、調査研究員の河村靖宏・山澤直樹と賃金職員の西山梨香が行なった。
- 5 本書は第Ⅰ章を河村、第Ⅱ・V章を山澤、第Ⅲ・IV章を渡邊が執筆し、山澤が編集した。
- 6 本書で使用した造構の表示記号SKは土坑を表す。
- 7 遺物の断面は、須恵器が黒塗り、その他は白抜きである。
- 8 本書に使用した北方位は、旧日本測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北を使用した。
- 9 第2図は国土交通省国土地理院発行の1：50,000地形図「三次」「上下」「乃美」、第3図は1：25,000地形図「吉舎」を使用した。
- 10 堪櫛の部位名称は、次のとおりである。



- 11 出土品及び記録類は、全て広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目8-49）において保管している。

本文目次

I はじめに	1
II 位置と環境	6
III 調査の概要	14
IV 調査の成果	18
Vまとめ	37

巻頭図版目次

- a 下矢井南第3～5号古墳遠景(東上空から) b 下矢井南第3～5号古墳近景(西上空から)
c 筒形石製品

挿図目次

第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図.....	4
第2図 吉舎町の主要遺跡分布図(1:50,000)	7
第3図 吉舎町北西部の主要古墳分布図(1:25,000)	9
第4図 周辺地形図(1:2,000).....	15
第5図 下矢井南第3～5号古墳調査前地形測量図(1:200)	16
第6図 下矢井南第3～5号古墳墳丘測量図(1:200).....	17
第7図 下矢井南第3号古墳墳丘土層断面図(1:60)	折込み
第8図 下矢井南第3号古墳出土遺物実測図(1:2).....	19
第9図 SK1・SK2実測図(1:40).....	19
第10図 下矢井南第4号古墳墳丘土層分類図(1:100)	20
第11図 下矢井南第4号古墳墳丘土層断面図(1:60)	折込み
第12図 下矢井南第4号古墳墳丘出土遺物実測図(1:3).....	21
第13図 下矢井南第4号古墳墳頂部遺構配置図(1:100)	22
第14図 下矢井南第4号古墳埋葬施設1実測図(1:30)	23
第15図 下矢井南第4号古墳埋葬施設1出土遺物実測図(1:2)	24
第16図 下矢井南第4号古墳埋葬施設2及び出土遺物実測図(1:30, 1:2, 1:1)	25
第17図 下矢井南第4号古墳埋葬施設3実測図(1:30)	27
第18図 下矢井南第4号古墳埋葬施設3出土遺物実測図(1:3, 1:2)	29
第19図 下矢井南第4号古墳埋葬施設4実測図(1:30)	30

第20図	下矢井南第4号古墳埋葬施設4出土遺物実測図(1:2).....	30
第21図	下矢井南第4号古墳埋葬施設5実測図(1:30).....	31
第22図	下矢井南第4号古墳盃掘坑内出土遺物実測図(1:2).....	33
第23図	下矢井南第5号古墳墳丘土層断面図(1:60).....	34
第24図	調査区内出土遺物実測図(1:3).....	35
第25図	全国の主な筒形石製品及び玉杖歛部.....	43
第26図	広島県内出土整備のムネ部寸法.....	46

表 目 次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧.....	2
第2表	吉舎町の古墳一覧.....	11
第3表	下矢井南第3～5号古墳埋葬施設一覧.....	14
第4表	出土遺物観察表(土器).....	36
第5表	出土遺物観察表(鉄製品).....	36
第6表	出土遺物観察表(石製品).....	36
第7表	出土遺物観察表(漆製品).....	36
第8表	吉舎町の円墳規模一覧.....	37
第9表	広島県内の粘土桿を有する主な古墳.....	40
第10表	全国の筒形石製品及び玉杖歛部を出土した古墳及び遺跡.....	42
第11表	広島県内の鉄斧を出土した主な前・中期古墳.....	45
第12表	広島県内の竖櫛を出土した主な古墳.....	46

図 版 目 次

図版1	a 古墳群全景(東上空から) b 同上全景(北上空から) c 同上全景(真上から)	図版4	a 第3号古墳SK1検出状況(北から) b 同上土層(北から) c 同上完掘状況(北から)
図版2	a 第3号古墳調査前全景(東から) b 同上全景(東から) c 機乱坑(北西から)	図版5	a 第3号古墳SK2検出状況(北東から) b 同上土層(北東から) c 同上完掘状況(北東から)
図版3	a 第3号古墳全景(北から) b 墳丘盛土肩(北から) c 墳丘盛土完掘状況(北から)	図版6	a 第4号古墳調査前全景(南西から) b 同上全景(西から) c 筒形石製品出土状況(南西から)

- | | | | |
|------|---|------|--|
| 図版7 | a 第4号古墳全景（南西から）
b 墳丘土層（南西から）
c 墳丘盛土完掘状況（南西から） | 図版12 | a 第4号古墳埋葬施設3粘土検出状況
(北西から)
b 同上遺物出土状況（北西から）
c 同上遺物出土状況（南西から） |
| 図版8 | a 第4号古墳墳丘土層
(南北方向北半、東から)
b 同上（南北方向南半、西から）
c 同上（東西方向東半、北から）
d 同上（東西方向西半、南から） | 図版13 | a 第4号古墳埋葬施設3遺物出土状況
(北西から)
b 同上遺物出土状況（北東から）
c 同上完掘状況（北西から） |
| 図版9 | a 第4号古墳盗掘坑検出状況（南西から）
b 同上完掘状況（南西から）
c 同上遺物出土状況（北西から） | 図版14 | a 第4号古墳埋葬施設4遺物出土状況
(南から)
b 同上埋葬施設5完掘状況（北から）
c 同上（西から） |
| 図版10 | a 第4号古墳埋葬施設1粘土検出状況
(北西から)
b 同上遺物出土状況（北西から）
c 同上完掘状況（北西から） | 図版15 | a 第5号古墳調査前全景（南西から）
b 同上全景（南西から）
c 同上墳丘盛土完掘状況（南西から） |
| 図版11 | a 第4号古墳埋葬施設1遺物出土状況
(西から)
b 同上埋葬施設2粘土検出状況
(北東から)
c 同上遺物出土状況（北東から） | 図版16 | 出土遺物1 |
| | | 図版17 | 出土遺物2 |



遺跡報告会の模様（平成19年12月）

I はじめに

下矢井南第3～5号古墳の発掘調査は、山陽自動車道・中国自動車道・山陰自動車道を結ぶ中國横断自動車道尾道松江線の建設事業に係るものである。事業は、瀬戸内海地域と日本海地域間における輸送時間の短縮と一般道の交通混雑の緩和を図り、沿線地域の産業・経済・文化を発展させることを目的としている。

工事着手に先立ち、日本道路公团中国支社尾道工事事務所（以下「道路公团」という）は、平成13（2001）年2月7日、当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下「県教委」という）と協議した。これを受けた県教委は現地踏査を行い、平成14（2002）年9月24日に事業地内に試掘調査が必要な箇所がある旨を回答した。

その後、道路公团は解散し、平成17（2005）年10月1日に本建設事業は西日本高速道路株式会社に引き継がれ、平成18年度からは国土交通省中国整備局三次河川国道事務所（以下「国交省」という）に承継された。

県教委は、平成18（2006）年11月8日～9日に当該箇所の試掘調査を実施し、平成19（2007）年1月23日に下矢井南第3・4号古墳の範囲を確定すると共に、下矢井南第5号古墳の存在を確認した旨を国交省に回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と国交省は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。国交省は、平成19（2007）年9月7日付で三次市教育委員会（以下「三次市教委」という）宛てに文化財保護法（以下「法」という）第94条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し、三次市教委は同年9月11日付けで国交省宛てに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。これを受け、国交省は同日付けで財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「教育事業団」という。）に下矢井南第3～5号古墳の調査依頼を行ない、同日付けで委託契約を締結した。教育事業団は同年9月28日に法第92条第1項の規定に基づく発掘調査届を三次市教委宛て提出し、三次市教委から同年10月1日付けで法の趣旨を尊重して慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。発掘調査は、同年10月9日から12月21日まで行なった。

本書は、以上のような経緯のもとに行なった発掘調査の成果をまとめたものであり、埋蔵文化財の資料として、地域の歴史を知る手がかりとなれば幸いである。

発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所、三次市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。整理にあたっては、古瀬清秀氏（公益財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査指導委員、広島大学大学院文学研究科教授）に貴重な指導・助言等を賜ったほか、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、今尾文昭氏（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館学芸課長）、植田広氏（東広島市出土文化財管理センター主査）、内田実氏（福山市教育委員会文化課主事）、吉澤悟氏（奈良国立博物館学芸部情報サービス室長）に資料収集の御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧(1)

報告番	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡 (北郊群)	第1次 歪状堅壁群	平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
		第2次 1～4郭	平成15年7月7日～ 10月31日			
		第3次 西堅壁	平成15年11月10日～ 11月28日			
曾川2号道路		平成15年1月20日～ 3月7日		尾道市御調町大町字曾川	古代末～中世	集落跡
(2)	曾川1号道路	A地KU 山・平成14年度調査区	平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町大町字曾川	弥生時代～中世	集落跡
		B地KU 山-P2第一・調査区	平成15年4月7日～ 5月23日			
		C地KU 山-P2第二・調査区	平成16年1月6日～ 2月5日			
		D地KU 山-P1	平成16年1月6日～ 2月5日			
(3)	池ノ奥古墳	平成16年8月23日～ 10月28日		広島県世羅町吉原字天神	古墳時代後期	古墳
城根遺跡			平成15年1月27日～ 3月7日	尾道市御調町大町字城根	古墳時代か	箱式石棺
(4)	牛の皮城跡 (北郊群)	第1次 5郭	平成18年1月30日～ 2月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
	曾川1号道路	E地KU 山-P4	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町大町字末田	绳文時代後期～中世	包含地
(5)	曾川1号道路	G地KU 山-P3	平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町大町字曾川・末田	弥生時代～中世	集落跡
		H地KU 山-P3側道	平成17年1月11日～ 3月4日			
		I地KU 山-P3側道	平成17年1月11日～ 3月4日			
(6)	曾川1号道路	K地KU	平成17年4月11日～ 7月1日	尾道市御調町大町字曾川・末田	弥生時代～中世	集落跡
(7)	札場古墳	平成17年11月21日～ 平成18年1月27日		三次市后山町字札場	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡	平成19年6月25日～ 10月5日		三次市后山町字大平	弥生時代後期～古代	集落跡
	後山大平古墳	平成19年6月25日～ 10月5日		三次市后山町字大平	古墳時代後期	古墳
(8)	北野山遺跡	平成18年7月3日～ 8月11日		三次市吉名町敷地字北野	平安時代	仏教関連の施設跡
(9)	向江田中山遺跡	平成18年4月17日～ 6月23日		三次市南田川町字向山田	古墳時代末～古代	集落跡
(10)	権現第1～3号古墳	平成17年7月11日～ 11月11日		三次市南田川町字権現	古墳時代中期	古墳
(11)	大番奥池第1～3・7号古墳	平成18年4月17日～ 8月4日		三次市吉名町敷地字山田	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳	平成20年7月7日～ 9月5日		三次市甲斐町宇賀茶臼	古墳時代中期	古墳
(13)	潮ノ越南古墳	平成19年6月25日～ 8月10日		三次市南田川町字潮ノ越	古墳時代中期	古墳
(14)	上跡遺跡	平成19年7月9日～ 8月31日		三次市南田川町字上跡	古墳時代中期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡(第2次)	平成19年9月25日～ 12月21日		三次市和知町字白鳥	後期縄石器時代	集落跡
(16)	曲第2～5号古墳	平成19年7月2日～ 9月21日		庄原市山田町金田字本谷	古墳時代中期	古墳
		平成19年12月3日～ 12月7日				
(17)	家ノ城跡	第1次 南東郭群	平成15年9月16日～ 10月31日	尾道市本ノ庄町本製 字東城東平	中世	城跡
		第2次 南東郭群	平成16年5月17日～ 6月11日			
		第3次 1郭周辺	平成17年10月17日～ 11月11日			
		第4次 1郭・北城根	平成18年1月17日～ 7月21日			
		第5次 1郭・西北北根	平成19年4月16日～ 6月15日			
(18)	片野中山第9～12号古墳	平成19年4月16日～ 8月8日		三次市吉名町敷地字中山	古墳時代中期	古墳
(19)	右谷遺跡	平成19年4月16日～ 8月8日		三次市吉名町敷地字中山	古墳時代後期～古代	集落跡
		平成18年4月17日～ 12月22日		三次市和知町字白鳥・四 拾吉町字三重	古墳時代中期～古代	

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧(2)

報告書	道路名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(20) 段道路	第1次		平成18年9月19日～12月15日	三次市四拾吉町字段	古墳時代中期～後期	集落跡
	第2次		平成19年9月25日～12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21) 川平第1号古墳			平成20年4月21日～6月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古墳
常定川平1号道路					古墳時代後期	道路
常定川平2号道路					縄文時代	窓穴
(22) 福干塙第2～4・9号古墳			平成19年10月9日～12月21日	庄原市口和町大月字福干塙	古墳時代後期	古墳
(23) 只野原1号道路			平成20年9月8日～9月26日	庄原市高野町下門田字只野原	古墳時代	箱式石棺
只野原2号道路			平成22年4月19日～11月19日		—	自然流路
只野原3号道路	第1次	平成21年5月18日～8月28日	旧石器時代～古墳時代		包含地 集落跡	
	第2次	平成22年4月19日～11月19日				
(24) 番久道路			平成20年7月28日～12月25日	庄原市口和町大月字番久	縄文時代	集落跡 窓穴
原畠道路					弥生時代	集落跡
(25) 向泉川平1号道路			平成20年4月21日～7月11日	庄原市口和町向泉字川平	旧石器時代	包含地
向泉川平2号道路					弥生時代～古墳時代	集落跡
(26) 石谷2号道路	第1次		平成21年4月13日～6月12日	庄原市口和町金田字塙谷	縄文時代	窓穴
	第2次		平成22年4月12日～6月23日			
石谷3号道路			平成21年4月13日～6月12日	庄原市口和町金田字塙谷	古墳時代後期	集落跡
(27) 馬ヶ段道路			平成20年4月21日～7月11日	庄原市水越町字馬ヶ段	古墳時代後期～奈良時代前期	集落跡 窓穴
馬ヶ段第1号横穴墓				庄原市水越町字馬ヶ段	～	
馬ヶ段第2号横穴墓				庄原市水越町字馬ヶ段	古墳時代後期	墓葬跡
(28) 三重1号道路	第1次		平成20年11月4日～12月19日	三次市四拾吉町字三重	古墳時代～古代	集落跡
	第2次		平成21年4月13日～9月25日		古墳時代中期	集落跡
宮の本第20～26・31・32号古墳			平成19年4月16日～12月21日		古墳時代前期～後期	古墳
(30) 四東第1～7号古墳	四東第1～7号古墳		平成20年5月7日～9月26日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代中期	古墳
岡1号道路			平成20年5月7日～9月26日	庄原市高野町岡大内字岡	時代不詳	窓穴
岡2号道路			平成21年4月13日～5月15日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	集落跡
半戸1号道路			平成22年4月12日～5月14日	庄原市高野町岡大内字半戸	縄文時代か	窓穴
岡東第1号横穴墓			平成24年9月3日～9月21日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	横穴墓
(31) 風呂谷道路			平成21年4月13日～11月20日	三次市四拾吉町	後期旧石器時代 縄文時代早期 古墳時代後期 古代	包含地 集落跡
風呂谷古墳			平成21年4月13日～11月20日	三次市四拾吉町	古墳時代後期	古墳
(32) 宮の本道路			平成20年4月21日～10月31日	三次市向江田町字宮本	古代	集落跡
宮の本第11～33～35号古墳			平成20年4月21日～10月31日	三次市向江田町字宮本	古墳時代後期～古代	古墳
箱山第3～6号古墳			平成18年8月21日～12月8日	三次市向江田町字箱山	古墳時代前期～後期	古墳
下矢井兩第3～5号古墳			平成19年9月9日～12月21日	三次市吉舎町下矢井字西見山・敷地字北野山	古墳時代前期～中期	古墳
若見道路			平成19年4月16日～5月25日	三次市三良坂町岡田字若見道	古代	集落跡
煙尻道路			平成21年4月13日～6月5日	三次市三良坂町岡田字烟尻	旧石器時代 縄文時代 近世	集落跡
三瀬山道跡			平成24年4月9日～8月10日	三次市三良坂町長田字三瀬山・當山	中世～近世	墳墓
頓藤城跡			平成20年4月21日～7月31日	三次市甲坂町小童字塙ヶ迫・小豆山	中世	城跡
杉谷道路			平成21年9月7日～10月16日	批羅部郡町東上原字杉谷	古墳時代 中世～近世	集落跡



第1図 中国横断道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図 (1)～(38)は報告書番号

第1表の報告書

- (1) 財團法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号道路 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』 2005年
- (2) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号道路(A～D地区)』 2006年
- (3) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』 2007年
- (4) 団体法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 曾川1号道路(E地区) 牛の皮城跡(第4次)』 2008年
- (5) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号道路(G～J地区)』 2008年
- (6) 团体法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曾川1号道路(K地区)』 2008年
- (7) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年
- (8) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』 2009年
- (9) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向田中山遺跡』 2010年
- (10) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 権現第1～3号古墳』 2010年
- (11) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大畠奥池第1～3・7号古墳』 2010年

- (12) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12)茶古墳』2011年
- (13) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13)瀬戸越南古墳』2011年
- (14) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(14)上陣遺跡』2011年
- (15) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15)和知白鳥遺跡1(旧石器時代の調査)』2011年
- (16) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16)曲第2～5号古墳』2011年
- (17) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17)家ノ城跡(第1～5次)』2012年
- (18) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18)片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡』2012年
- (19) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(19)和知白鳥遺跡2(古墳時代の調査)』2012年
- (20) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20)段遺跡(第1・2次)』2012年
- (21) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21)川平第1号古墳・常定川平1号遺跡・常定川平2号遺跡』2012年
- (22) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22)稻干場第2～4・5号古墳』2012年
- (23) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(23)只野原1号遺跡・只野原2号遺跡・只野原3号遺跡』2013年
- (24) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(24)番久遺跡・原煙道跡』2013年
- (25) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(25)向泉川平1号遺跡・向泉川平2号遺跡』2013年
- (26) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(26)石谷2号遺跡・石谷3号遺跡』2013年
- (27) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(27)馬ヶ段遺跡・皇庭遺跡』2013年
- (28) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(28)三重1号遺跡』2013年
- (29) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(29)宮の本第20～26・31・32古墳』2013年
- (30) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(30)岡東第1号横穴墓・岡東第1～7号古墳・岡1号遺跡・岡2号遺跡・只野原1号遺跡・半戸1号遺跡』2013年
- (31) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(31)風呂谷遺跡・風呂谷古墳』2014年
- (32) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(32)宮の本遺跡・宮の本第11・33～35号古墳』2014年
- (33) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(33)箱山第3～6号古墳』2014年
- (34) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(34)下矢井南第3～5号古墳』2014年
- (35) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(35)若見遺跡・烟尻遺跡』2014年
- (36) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(36)三隅山遺跡』2014年
- (37) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(37)賴藤城跡』2014年
- (38) 公益財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(36)杉谷遺跡』2014年

II 位置と環境

下矢井南第3～5号古墳は、広島県三次市吉舎町に所在する。三次市は中国山地中央部に形成された三次盆地を中心に広がる山間の都市で、県北部最大の人口（約56000人。平成25年9月1日時点）を有する。平成16（2004）年4月の市町村合併によって、49km×31kmの北西一南東方向に長い市域（面積約778.19km²）となり、南は東広島市、北は島根県に接する。吉舎町は三次市の南東部に位置し、東は甲奴町及び庄原市総領町、西は上田町・大田幸町、南は世羅郡世羅町、北は三良坂町に接する。かつては周辺の三良坂町・三和町などと共に双三郡に属していた。面積84km²になる町域の80%は山林で、耕地は10%ほどである。西の撫白山（標高522.5m）、南東の水呑山（標高557.2m）を最高所とした標高約250m～500mの丘陵地帯となっており、世羅台地や甲奴高原を控えた南東部の標高が高い南高北低の地勢となる。そのため、町を二分するよう馬洗川は北へと流下し、その後町の北東を流れる上下川と三良坂町で合流して西に流れ、三次市街を抜けながら本流・江の川となり、やがて日本海に注ぐ。この馬洗川と上下川の支流沿いには狭長な谷底平野が形成されており、耕地や宅地に利用されている。

吉舎町は、古くから備後北部と南部を結ぶ交通の要衝で、県指定史跡・三玉大塚古墳などの古墳を中心とする文化財が数多く残されている。ここでは、三次市吉舎町とその周辺を含めて、歴史的環境について述べていきたい。

旧石器時代

町の南端にある徳市遺跡で二側縁加工の小型ナイフ形石器2点（安山岩・流紋岩製）が採集され、隣の三良坂町でも塩野裏遺跡で安山岩製ナイフ形石器、沖江龍王山遺跡で黒曜石製尖頭器が出土している。

縄文時代

明確な遺跡は町内にないが、敷地・矢野地で石斧が、徳市で石匙が出土したと伝えられる。三良坂町では皆瀬北遺跡で漁労活動に使われた多数の石錐が出土したほか、植松古墳群や岡田山第3号古墳の調査時に土器や石器類が出土している。また、油免遺跡では底部中央に杭穴跡を有する陥穴群が検出されている。

弥生時代

南部の徳市遺跡・八斗田遺跡（徳市）、北西部の敷地本郷遺跡（敷地）などで弥生土器・土師器・石器類が出土しており、弥生～古墳時代の集落跡の存在が想定されていたが、寺津第1・2号古墳（知和）の調査時に竪穴住居跡や土坑を、加村遺跡（知和）の試掘調査で柱穴を確認した。また、右谷遺跡（敷地）でも上方からの流れ込みと思われる壺形土器や甕の破片が出土しており、上下川や馬洗川に面する比高30～50mの小高い丘陵上に立地していた弥生集落の姿が明らかになりつつある。



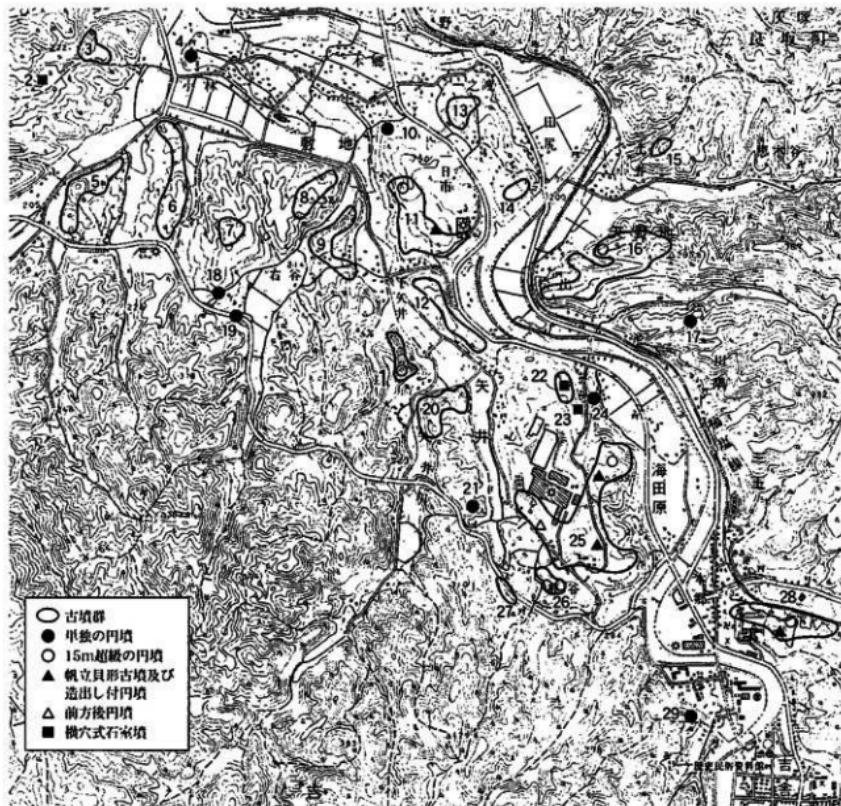
第2図 吉舎町の主要道路分布図 (1:50,000)

古墳時代

三次市は日本有数の古墳密集地域であり、吉舎町には350基を超える古墳が存在する。その分布は町内全域にわたるが、大半は北西部と北東部に集中する。ほとんどが直径15m以下の円墳であるが、全長25～50mほどの前方後円墳2基・帆立貝形古墳⁽¹⁾3基・造出し付円墳1基・前方後方墳1基も存在し、市内の大型帆立貝形古墳が集まっている。古墳の立地は、概ね平野に面した標高200～300mの丘陵上に単独で存在するものと複数で群を成すものがある。前者は町域の縁辺部に近い丘陵上やその周辺に分布する。後者は2～3基単位で群をなすものが最も多く、4～6基単位のものやこれらが複数集まったものもある。以下では、町内を北東・北西・中南の3地区に分けて、古墳の様相を概説する。

北東部 上下川流域にある知和・上安田・安田地区で、古墳の総数は59基である。前方後円墳1基・前方後方墳1基を除くほとんどが円墳で、上下川やその支流沿いの谷底平野に面した丘陵上や斜面に立地し、概ね単独又は10m以上の古墳を中核とした2～3基の群構成で存在する。前方後円墳は、安田第7号古墳（全長26m、安田）のみである。町内唯一の前方後方墳である寺津第3号古墳⁽²⁾（知和）は全長40mで、北西部の大型古墳に匹敵する規模を誇る。平成元（1989）年の調査で前方部に粘土構・箱式石棺・石蓋土坑が確認されており、5世紀後半～6世紀初頭の築造と考えられている。円墳は、神崎第4号古墳（直径22m、上安田）と中郷第3号古墳（直径16m、安田）が直径15mを超えるが、ほとんどが直径13m以下である。このうち、調査の行われた寺津第1・2号古墳は直径9.8～10.5mの円墳で、木棺を埋葬施設とする。墳丘や周溝内から破碎された大甕など多くの須恵器が、埋葬施設から須恵器の蓋杯や玉類（勾玉・管玉）、刀子などが出土し、6世紀前葉～中葉の築造と考えられる。このほか、17基の古墳で竪穴式石室・箱式石棺、横穴式石室などが確認されており、他の2地区に比べると竪穴式石室と箱式石棺の比率が高い。また、横穴式石室も比較的多く、上下川支流沿いの丘陵斜面に単独又は2基単位で存在する古墳によくみられる。その分布状況から、古墳時代後期には上下川上流や谷奥部の開拓が進んだことをうかがわせる。

北西部 馬洗川流域の敷地・矢井・海田原・矢野地・三玉・吉舎地区で、古墳の総数は279基である。前方後円墳1基・帆立貝形古墳⁽³⁾3基・造出し付円墳1基以外は円墳で、馬洗川やその支流沿いの谷底平野を望む丘陵上や斜面に立地する。単独で存在するもの又は2～4基単位で群を成すものが目立つが、これらが複数集まって総数20基を超す古墳群も存在する。前方後円墳は全長28mの海田原第21号古墳（矢井）のみで、北東部の安田第7号古墳と墳形や規模が類似する。これを超える町内最大の古墳が、全長45mの造出し付円墳とされる八幡山第24号古墳（旧八幡山第1号古墳、敷地）である。直径40mの円丘部に対し、造出し部はわずか5mで、帆立貝形と言⁽⁴⁾い難い。周囲には幅5～10mの濠が巡っている。明治期に鏡・鉄劍・鉄刀・甲冑類が出土したと伝えられるが、埋葬施設は不明である。他の大型古墳は帆立貝形古墳で、いずれも地区内の前方後円墳より大きく、三次盆地における中期古墳の典型的な在り方を示している。その1つが「三玉大塚古墳」の名で知られる全長42mの三玉第1号古墳（三玉）で、県史跡に指定されている。



*下線部や()は第2図と同じ。

- | | | | |
|---------------|---------------|----------------|---------------|
| 1 下矢井南古墳群(5) | 3 鶯塙古墳群(9) | 4 小林古墳 | 5 一本木古墳群(12) |
| 〔戴地の古墳〕 | 7 大番奥池古墳群(7) | 8 明神山古墳群(17) | 9 下矢井北古墳群(7) |
| 2 コウズミ西古墳 | 11 八幡山古墳群(30) | 12 中山古墳群(19) | 13 ～之瀬古墳群(3) |
| 6 片野中山古墳群(15) | 15 土井古墳群(2) | | |
| 10 八幡山北古墳 | 17 日暮目古墳 | | |
| 14 田尻古墳群(4) | 19 鹿東古墳 | 20 矢井中山古墳群(12) | 21 四ノ采古墳 |
| 〔矢野地の古墳〕 | 23 長畠山古墳 | 24 犀半古墳 | 25 海山原古墳群(33) |
| 16 矢野地古墳群(45) | 27 宮前古墳群(2) | | |
| 〔矢井・海田原の古墳〕 | 28 三玉古墳群(9) | | |
| 18 煙古墳 | 29 善通寺山古墳 | | |
| 22 長畠山北古墳群(6) | | | |
| 26 後山山古墳群(4) | | | |
| 〔三玉・善通寺の古墳〕 | | | |
| 28 三玉古墳群(9) | | | |

第3図 吉舎町北西部の主要古墳分布図 (1:25,000)

明治期に埋葬施設の豊穴式石室から筒形銅器・製鏡（珠文鏡・変形文鏡）・武具類（短甲・刀剣・矛等）・装身具（玉類）など多量の遺物が出土した。その後、史跡整備に伴う調査が行われ、2段築成の墳丘に葺石と円筒埴輪を巡らせていることが判明し、遺物などから5世紀後半の築造と考えられている。このほか、全長40mの海田原第20号古墳（旧海田原第4号古墳、矢井）、全長33mの同第29号古墳（旧海田原第24号古墳、矢井）もあり、「八幡山第24号古墳→三玉第1号古墳→海田原第20号古墳→同第29号古墳」という首長墓の推移が想定されている。これら大型の古墳は連続する盟主的古墳とみられ、これらが集中する矢野地・海田原・三玉は当地域の中心地と考えられる。円墳は最大の八幡山第1号古墳（直径28.5m、敷地）をはじめ、三玉第5号古墳（直径23.5m、三玉）、矢野地第45号古墳（直径16.5m、矢野地）など直径15mを超えるものが10基（円墳全体の3.7%）あり、残りの半分以上が直径10m以下である。これら円墳のうち、燎東古墳（矢井）、片野中山第9～12号古墳（敷地）、大番奥池第1～3・7号古墳（敷地）、殿平古墳（矢井）、長畠山古墳・長畠山北第1～6号古墳・海田原第24～27号古墳（海田原）で調査が行われている。

燎東古墳は、比高20mの丘陵端部に立地する直径8mの円墳で、木棺2基と墳丘裾部に位置する石蓋土坑1基が検出された。鉄刀・刀子片・須恵器などが出土し、6世紀前半の築造とされる。片野中山第9～12号古墳は、低丘陵上に築造された直径9～10mの円墳群で、木棺を埋葬施設とする。埋葬施設から刀子、周溝内から須恵器が出土し、5世紀末～6世紀前半の築造とされる。大番奥池第1～3・7号古墳は、これらから谷を挟む東側丘陵上に立地する直径4.6～11mの円墳群である。第2号古墳で鉄器を副葬した木棺と須恵器蓋杯を副葬した木棺、第3号古墳で鉄器を副葬した木棺・土坑各1基と須恵器蓋杯を副葬した木棺2基が検出され、同一墳丘内で鉄器副葬と土器副葬に副葬形態が分かれる事例として注目される。遺物から6世紀前半の築造とされる。殿平古墳は、馬洗川西側の丘陵上にある直径7.5mの円墳である。埋葬施設の箱式石棺から遺物は出土しなかったが、石材を横長に配する形態をもつことから、5世紀代の築造と考えられる。長畠山古墳は、南に開口する横穴式石室を有する直径12mの円墳である。石室内では床の一部に須恵器が密集するほか、鉄鎌・玉類・耳環が出土し、6世紀末～7世紀中頃の構築と考えられる。



▲複数埋葬を行なった大番奥池第3号古墳

長畠山北1～6号古墳は直径5～7.2mの円墳群で、埋葬施設に木棺、豊穴式石室、横穴式石室が混在することから、埋葬施設の変遷を考える上で注目される。埋葬施設や周溝から刀・斧・鎌などの鉄器類や須恵器の蓋杯、土師器などが出土し、6世紀中頃～後半の築造と推定される。海田原第24～27号古墳は、直径9～約17mの円墳群で、第25号古墳のみ木棺を検出した。周溝や周溝内土坑から鉄器・玉類・須恵器などが出土し、5世紀後半～6世紀代の築造とされる。

このほか、三玉第3号古墳（三玉）で木棺が、コウズミ西古墳（旧狐塚古墳 敷地）や海田原第31号古墳（海田原）など4基の未調査古墳で横穴式石室が確認されている。横穴式石室を有する古墳は単独で存在するものが多く、その数は近年の調査によって増えつつあるが、北東部や南部に比べると少ない。

中南部 北西部より馬洗川上流の清鋼・桧・丸田・徳市地区で、古墳の総数は21基である。全て円墳で、扇追山古墳（直径18.5m、清鋼）以外は直径12m以下である。ほとんどが単独又は2基程度を単位とする群構成で、谷底平野に面した丘陵上に立地する。このうち、西本山古墳群（清鋼）・太才古墳（桧）・空山古墳（徳市）など8基の古墳で横穴式石室を有するが、竪穴式石室や石棺などは確認されていない。

以上、北東部・北西部とも前期古墳の様相が明確でないが、中期以後古墳が急増する。ただし、川筋も違うことや前方後方墳の存在からもそれぞれ別個の地域集団と思われる。古墳が圧倒的に多い北西部は複数の地域集団が想定され、八幡山第24号古墳を始めとする大型古墳は各集団の中心的存在とみられる。畿内色の強い三玉第1号古墳など大型帆立貝形古墳が集中することから、三次盆地一帯における中心地の一つであったと考えられている。後期以降も両地域の古墳構築は続くが、北西部は全体数に比べ後期古墳数が少ない。一方、中南部は他の2地区に比べると古墳が少なく、竪穴式石室や箱式石棺が未だ確認されていない実態から古墳文化が盛行したのは後期以降といえ、古代交通路から外れた地理的影響が推定される。なお、町内の横穴式石室を有する古墳は単独又は2・3基単位で存在する傾向にあり、これは追葬可能となった古墳の変化に起因するものとみられる。同様の群構成をもつ古墳群が横穴式石室を有する可能性は高いといえるが、近年は6基から成る長畠山北古墳群で確認した例もあり、後期古墳が少なくないとされる吉舎町に未発見の横穴式石室が多く潜在している可能性が指摘されている。

吉舎町内の古墳時代集落については、調査例が少なく明らかにしがたいが、平成11（1999）年に試掘調査が行われた三田戸遺跡（安田）では土坑、右谷遺跡でも後半頃の竪穴住居跡が確認されている。また、敷地本郷遺跡や八斗田遺跡で土師器や須恵器が出土している。

第2表 吉舎町の古墳一覧

地 区	古墳の墳形 ※1					確認された埋葬施設 ※2					構成数別の古墳群 ※3												
	前円	前方	側立	道円	円 不明	計	竪室	粘土	石棺	石蓋	木棺	土坑	横室	単	2	3	4	5	6	7	8~ 計		
北 東	知和	1		6	7	1	2	1	2			1	1		2						3	6	
	上安田			19	19			2				5	3	2		1						1	7
	安田	1		31	1	33	3	2				3	6	5	2	1					1	15	
北 西	敷地			1 143	1 145					7	2	2	16	6	5	5	2	1	2	4	41		
	矢井・海田原	1	2	62	65	1	3	1	1	10	3	15	2	2	2					1	22		
	矢野地			48	48							3	1	2			1				4	11	
中 南	三玉	1	13	14	1				1		1	2	1	3								6	
	吉舎		7	7			1				2					1						3	
	清鋼			8	8						4	3	1	1								5	
	桧			3	1	4						1	2	1								3	
	丸田			4	4						2		2									2	
徳 市				5	5						1	3	1									4	
	合 計	2	1	3	1 349	3 359	5	4	8	2	20	2	23	56	22	17	9	3	2	4	12	125	

※1 矢井・南山原は、同一古墳群内で両地域に跨る古墳が多いため、1つに合わせた。

※2 埋葬施設は、竪室=竪穴式石室、粘土=粘土構造、石蓋=石蓋土坑、横室=横穴式石室である。

※3 古墳群は、広島県遺跡地図や現地踏査図の観察によって支群に分けた。

古代

古代には、吉舎町の大半は三谷郡に含まれるが、上安田・知和地区は甲努（奴）郡に、徳市は世羅郡に属する。『和名類聚抄』によると、平安時代初めの三谷郡には三谷・松部（私部の誤記とされる）・江田・額田・刑部の5郷があり、吉舎町は松部郷に比定されている。郷名から皇后のために設けられた部民（私有民）である「私部（きさいべ）」に関わる地域といわれ、延喜式や平城京跡出土木簡に三谷郡を始め備後国北部の諸郡が庸・調として鉄や錫を納めたことから、古くから当地域で鉄を産出したことが分かる。

古代の遺跡として、右谷遺跡や北野山遺跡が調査されている。右谷遺跡は先述の堅穴住居跡のほかに掘立柱建物跡1棟、蔵骨器を納めた土坑等を検出し、古墳時代後期～奈良時代の集落跡とされる。北野山遺跡は掘立柱建物跡2棟や柱穴列を検出し、須恵器の鉄鉢形土器や転用鏡、灯明用らしき杯等の出土遺物から9世紀後半～10世紀初頭の仏教関連施設遺跡とされる。このほか、平安時代末～鎌倉時代初頭の寺院跡とされる上安田廃寺跡（上安田）がある。

中世以降

建久3（1192）年、武藏国から下向した広沢氏が三谷郡の大半を所領としたが、13世紀後半に広沢氏は和智・江田の両氏に分かれた。このうち、和智氏が三谷郡北部を領有し、吉舎の南天山城を本拠とした。戦国期には尼子氏の配下となるが、その後毛利方につき、この時に和智氏の館周辺に町人が定着して集落が発展したといわれる。

中世以降の遺跡としては、連続した郭群や井戸を有する南天山城跡（吉舎）、3条の堀切を持つ池尻城跡（知和）、郭群や土壘・堅塙群で構成される平松山城跡（三玉）、5つの郭が並ぶ堂元山城跡（辻）、矢野地土居館跡（矢野地）などの城館跡がある。このほか、積石方形基壇を設けた和智誠春墓（丸田）や宝篋印塔が建つ和智勝之墓（清鋼）などの古墓も多く、建物跡が残る県史跡・吉寺廃寺跡（桧）やかつての交通路を偲ばせる県史跡・中山一里塚（吉舎）などもある。

註

- (1) 古墳の名称・位置・規模・埋葬施設などの基本情報は、広島県教育委員会ホームページ『広島県遺跡地図』(<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/bunkazai/list526-2231.html>)による。
- (2) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『植松古墳群』1987年
- (3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『岡田山第3号古墳』1984年
- (4) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『油免遺跡』『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(IV)』2003年
- (5) これ以外に、厳島神社境内遺跡（和知）の箱式石棺も弥生～古墳時代のものとされている。
- (6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『寺津古墳群』『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(I)』1994年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18)片野中山第9～12号古墳 右谷遺跡』2012年
- (8) 個立貝形古墳の定義は『前方後円墳集成－中国・四国編一』（近藤義朗、山川出版1991年）による。
- (9) 註6に同じ。
- (10) 吉舎は、馬洗川流域であるため北東部とは分けた。また、谷筋を通って字賀に抜けるルートは古代交通路が想定されていることから、当交通路の通る地域とその南側地域を分ける意味で北西部に含めた。
- (11) ここには含まれていないが、三玉第1号古墳の北東に位置する岡第4号古墳も墳丘から埴輪等が出土して

おり、墳形は帆立貝形古墳又は前方後円墳との指摘がある。

- (12) 高田明人・山崎やよい「おむすびと豆たたき 一 双三郡吉舎町八幡山古墳測量雑感一」『続トレンチ』第3巻第1号 1979年
- (13) 当古墳は文献・報告書によって「前方後円墳」又は「帆立貝形古墳」と意見が異なるが、註8の文献における帆立貝形古墳の定義や註12の文献に記載の測量図に照らしても、明らかに前方部が小さ過ぎる。これらをふまえ、当古墳を造出し付古墳と判断した。なお、沼澤豊氏は「帆立貝形古墳築造企画論 3.造出付円墳」(『季刊考古学』第82号 猛山閣2005年)において前方部反対側にも造出しが存在する可能性を指摘している。
- (14) 吉舎町教育委員会『三玉大塚』1983年
- (15) 吉舎町教育委員会『原東古墳』1995年
- (16) 註7と同じ。
- (17) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大畠奥池第1～3・7号古墳』2010年
- (18) 財團法人広島県教育事業団『殿平古墳』『年報6 平成20年度』2010年
- (19) 財團法人広島県教育事業団『長烟山古墳』『年報6 平成20年度』2010年
- (20) 財團法人広島県教育事業団『長烟山北第1～6号古墳』『年報7 平成21年度』2012年
- (21) 財團法人広島県教育事業団『海田原第24～26号古墳』『年報8 平成22年度』2012年
- (22) 註20と同じ。
- (23) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』2009年

参考文献

- 平凡社『日本歴史地名大系第35巻 広島県の地名』1982年
- 角川書店『角川日本地名大辞典34 広島県』1987年
- 吉舎町教育委員会『吉舎町史(上巻)』1988年
- 三次市『三次市史』I 2004年
- 広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第4集 1996年

III 調査の概要

下矢井南第3～5号古墳は、馬洗川支流の矢井川に沿って開けた狭長な平野部の西側にある丘陵尾根上に立地し、東側の水田との比高は約60mである。現状は山林で、第3・4号古墳の墳丘中央には古い盗掘坑が存在していた。調査は、各古墳の墳頂部を繋ぐように土眉観察用の畦を設定し、腐葉土及び表土を人力で取り除きながら行ない、3基とも周溝を巡らせた円墳であることが判明した。

第3号古墳は、第4号古墳の北西に位置する直径9.5～10.5mの円墳で、墳丘は低い。埋葬施設は後世の盗掘などにより消失しており、周溝埋土から鉄斧が出土した。また、周溝の東及び南東の底面では、埋土に炭化物を含む土坑2基を検出した。

第4号古墳は、尾根頂部の最高所に位置する直径17.5～18.8mの円墳で、本古墳群では最大である。墳丘の南西半には幅3.5～5mの周溝があり、谷側斜面となる北東半には狭い平坦面が巡る。墳頂部ではほぼ並列する埋葬施設1～4を、墳丘西裾部で埋葬施設5を検出した。いずれも割竹形木棺を用い、埋葬施設1～3は粘土櫛、埋葬施設4・5は木棺直葬の土坑である。墳頂部にある埋葬施設1～4からは共通して堅縫が出土したほか、鉄劍・鉄刀・鉄斧・鐵鎌などの鉄器類も出土したが、埋葬施設5からは出土遺物はない。このほか、墳頂部で土師器壺の破片や筒形石製品が出土した。

第5号古墳は、第4号古墳の東に隣接する直径6.8m～9.6mのやや椭円形気味の円墳である。墳丘流失が激しく、埋葬施設は確認できなかった。周溝埋土から土師器の小片が出土した。

なお、第3号古墳周溝の南西側で盛土用の土を掘削した痕跡と思われる掘込みが2箇所で確認されたほか、各古墳の周辺で土師器や須恵器の小片が出土した。

第2表 下矢井南第3～5号古墳埋葬施設一覧

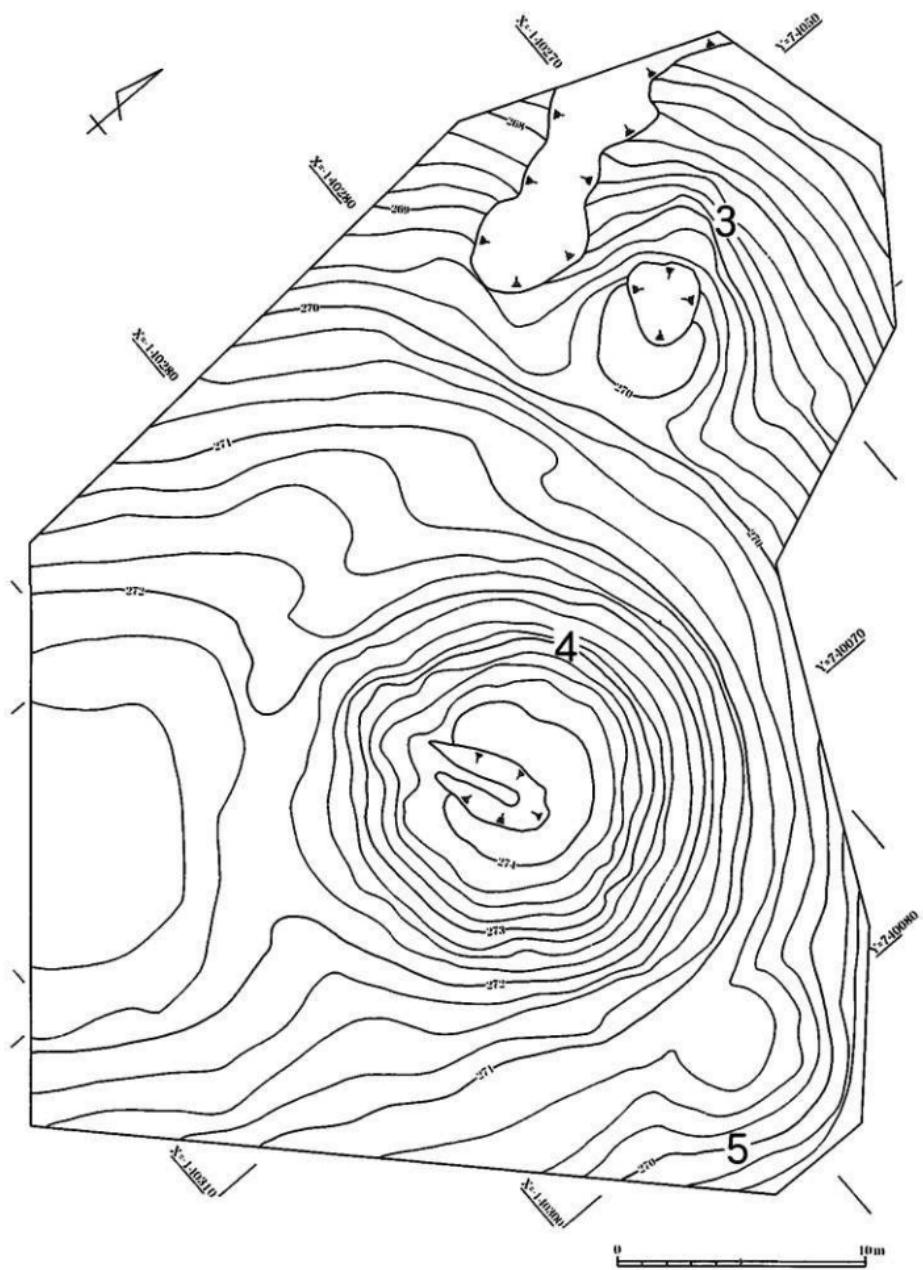
古墳及び 埋葬施設No.	内容	主軸方位	木棺(単位:m)					出土遺物	
			長さ	幅	深さ	形態	推定長	推定幅	
第3号古墳	—	—	—	—	—	—	—	—	鉄斧1(周溝内)
第4号古墳	1 粘土櫛 N 27° W	3.02	0.6	0.25	割竹形	2.9	0.5	堅縫1・鉄刀1	筒形石製品 ※2
	2 粘土櫛 N 40° W	1.0+	0.56	0.26	割竹形	—	0.5	堅縫2～3・鉄劍2※1	
	3 粘土櫛 N 44° W	3.0	0.6	0.25	割竹形	2.9	0.5	堅縫4・鉄劍1・鉄斧2・鉄鎌1・刀子1	
	4 木棺直葬 N 30° W	0.4+	0.44	0.15	割竹形	—	0.35+	堅縫1	
	5 木棺直葬 N 7° E	3.13	0.75	0.46	割竹形	2.35	0.45	なし	
第5号古墳	—	—	—	—	—	—	—	土師器片(周溝内)	

※1 盗掘坑内出土の鉄劍1・鉄刀1・鉄斧2は、付着した粘土から埋葬施設2の副作品と考えられる。

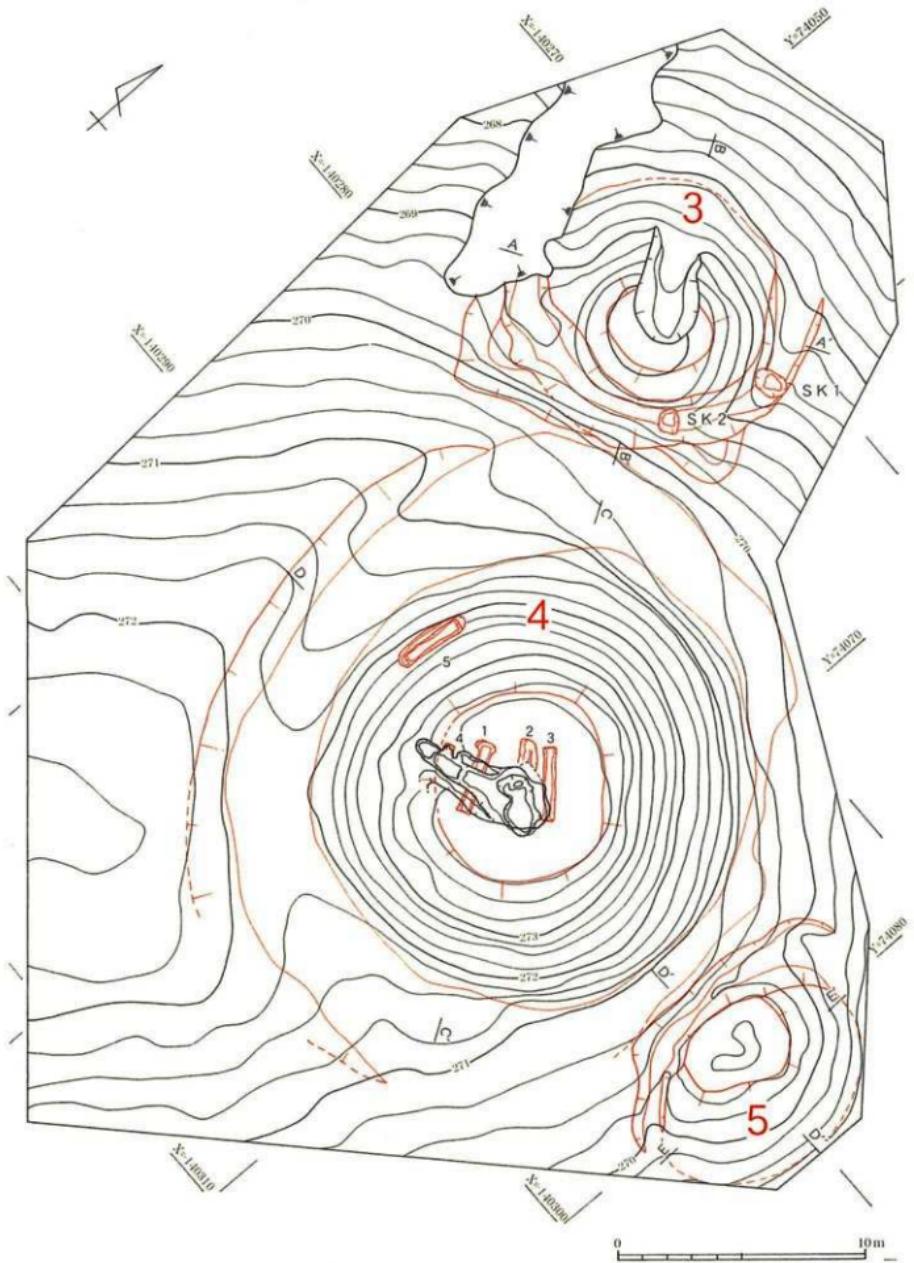
※2 筒形石製品は盗掘坑上端際で出土した。



第4図 周辺地形図(1:2,000)



第5圖 下矢井南第3～5号古墳調査前地形測量図(1:200)



第6図 下矢井南第3～5号古墳墳丘測量図(1:200)

IV 調査の成果

1 下矢井南第3号古墳

(1) 立地と調査前の状況(第5図、図版2a)

古墳は、尾根頂部から北に延びる尾根の斜面に立地し、調査前の観察でも橢円形を呈する墳丘の高まりが認められた。現状規模は長径10.5m、短径8.5mで、墳丘の高さは墳丘北側で約0.3m、南側で約1.7mであった。墳頂部に盗掘坑があり、その北側斜面には掘き出された土が堆積していた。また、墳丘の西側には後世の掘削が溝状に延びており、墳丘や周溝の一部を破壊していた。

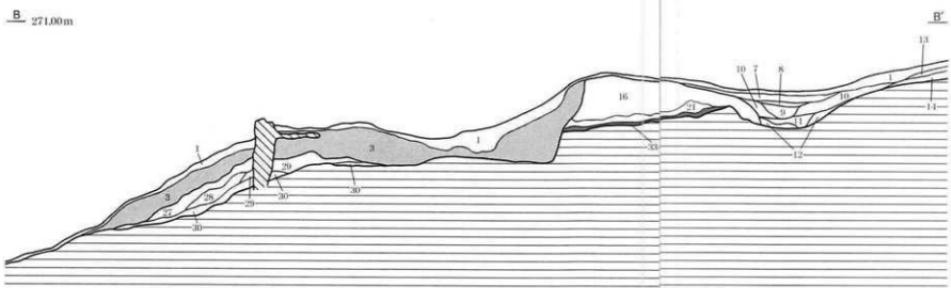
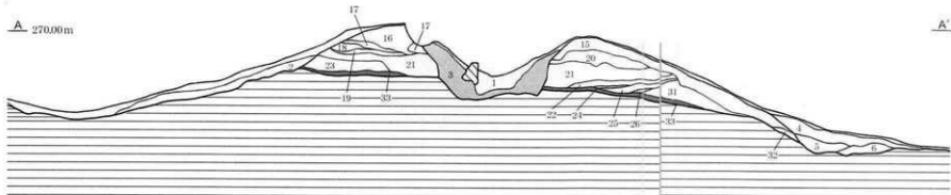
(2) 墳丘(第6・7図、図版2b・3a～3c)

墳丘はわずかに橢円形気味となる円形である。調査後の規模は南北9m、東西9.5mで、後世の掘削を受ける前は東西10.5mほどであったと推測される。墳丘の高さは北側で最大2mとなり、墳頂一帯には南北3m×東西4.3mほどの平坦面が存在する。

墳丘の土層は、概ね灰褐色土を最下層に、褐色系土、黄・橙色系土を順次盛土している。灰褐色土(土層33)は旧表土と考えられることから、尾根頂部の表土を墳丘基盤としたものと推測される。墳丘北側では旧表土が削平されていることから、やや平坦な北側の旧表土を掘削し、その土や周溝掘削土(旧表土が混じった褐色系土)をまず盛土した後、さらに地山土の周溝掘削土(黄・橙色系土)を順次盛って墳丘を築いたと想定される。その際、墳丘外縁部に土手状に土を盛り、その内側に土を充填する手順を踏んでいる。旧表土の上面は標高268.8～269.7mで、盛土の残存高は最大0.7m程度である。墳丘上や盛土の中から遺物は出土していない。墳丘のほぼ中央に存在する盗掘坑(南北4.5m、東西2.5m、深さ1.2m)は基盤土まで掘込んでおり、埋葬施設はこれによって失われたと推測され、周囲に石材等の散乱がないことから木棺又は土坑等であった可能性が高い。

(3) 周溝(第6図、図版2b・3a～3c)

周溝は、南から北に向かって傾斜する地形に合わせて墳丘背後を掘込んでおり、墳丘全体の1/2周程度をめぐる。幅1.7～2.8mで、ほぼ35°～55°の角度で掘込んでいる。深さは南東部で最大0.54mである。周溝底面は南側が最も高く、自然消滅する北東側とは1.5mほどの高低差がある。周溝底面には2基の土坑(SK1・2)が掘込まれており、周溝埋土に土坑を掘込んだ痕跡は確認できなかった。周溝の南西側斜面には方形状の掘込み、南東上側斜面にも不整形な掘込みがみられるが、土層や検出面では古墳との先後関係が確認できず、盛土用の土を掘削した痕跡と考えられる。遺物は、周溝東側(SK1付近)の埋土下層(底面から10cmほどの高さ)から鉄斧1点(1)が出土した。



表土・礫土・埋肥土

- 1 黄紫土
- 2 深黄褐色砂質土
- 3 明黄褐色砂質土
- 4 暗褐色砂質土
- 5 暗黃褐色土 (細粒)
- 6 暗黃褐色砂質土 (細粒)
- 7 暗黃褐色砂質土 (粗粒)
- 8 深黃褐色砂質土 (粗粒)
- 9 黑褐色砂質土 (腐化物を粒状に含む)
- 10 暗褐色砂質土
- 11 深黃褐色砂質土 (やや粘性。0.5~1cm大の礫含む)

- 12 明黃褐色砂質土 (やや粘性。0.5cm大の礫含む)
- 盛土
- 13 棕色土 (やや粘性)
- 14 暗黃褐色土 (0.5~1cm大の礫を含む)
- 15 明黃褐色土 (細粒)
- 16 暗褐色土 (やや粘性。0.5~2cm大の礫多)
- 17 暗褐色砂質土 (粗粒強)
- 18 暗褐色砂質土 (粗粒)
- 19 明黃褐色砂質土 (粗粒強。0.5cm大の礫含む)
- 20 暗褐色砂質土 (0.5~5cm大の礫多)
- 21 暗褐色砂質土 (0.5~1cm大の礫をやや含む)
- 22 暗褐色砂質土

- 24 黑褐色土
- 25 暗黃褐色砂質土 (礫なし)
- 26 24と同じ
- 27 暗黃褐色砂質土 (1~2cm大の礫や含む)
- 28 暗黃褐色土 (やや粘性。1~3cm大の礫や含む)
- 29 暗黃褐色土 (細粒。深さ)
- 30 暗褐色土 (細粒)
- 31 暗褐色砂質土 (0.5cm大の礫や含む)
- 32 深黃褐色土
- 33 固表土

0 4m

第7図 下矢井南第3号古墳埴丘土断面図 (1:60)

出土遺物 (第8図、図版16)

鉄斧(1) 無肩の有袋鉄斧である。袋部の大半を失い、刃部もかなり摩り減っている。残存長は6.5cm、刃部幅は推定4.6cmで、袋部上端幅は残存状況から2.5~3cm程度と考えられる。袋部は体部を薄く叩き延ばして折り返し、刃先は使用によって摩り減っているため、現状では弧を描く。袋部の断面形は隅丸長方形と推定される。

(4) 周溝内土坑

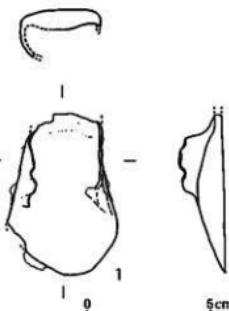
周溝の東側及び南東側の底面で土坑各1基を検出した。これらの土坑は周溝の底面から掘込まれている。

SK 1 (第9図、図版4a~4c)

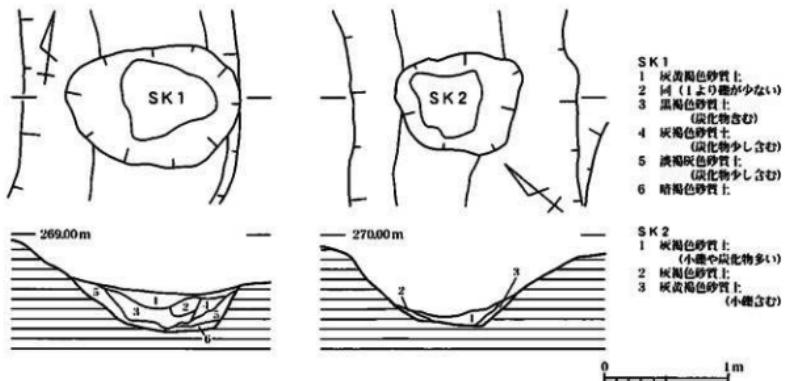
周溝の東底面に掘込まれた土坑である。平面形は長径1.4m、短径1.0mの梢円形で、土坑長軸は周溝に対して直交する。深さは最大0.5mで、底面は岩盤であるため不整形な平面形を呈している。埋土の中層には炭化物が含まれていたが、遺物は出土していない。

SK 2 (第9図、図版5a~5c)

周溝の南東底面に掘込まれた土坑である。平面形は推定長径1.0m、短径0.8mの不整な梢円形で、やはり土坑長軸は周溝に対して直交する。深さは最大0.3mで、底面は岩盤であるため不整形な平面形を呈する。埋土には炭化物が多量に含まれていたが、遺物は出土していない。



第8図 第3号古墳出土遺物実測図
(1:2)



第9図 SK 1・SK 2実測図 (1:40)

2 第4号古墳

(1) 立地と調査前の状況(第5図、図版6a)

古墳は、尾根頂部の北東側先端付近に位置し、調査前の観察で明瞭な墳丘の高まりが認められた。調査前の墳丘高は南西側で約2m、北東側で約4mである。墳丘は直径約20mの円墳で、墳丘の東裾部は第5号古墳によって壊されている。また、墳丘中央には後世の盗掘坑があり、西側には排出された土が堆積していた。

(2) 墳丘(第6・10・11・13図、図版6b・7a～8d・9a)

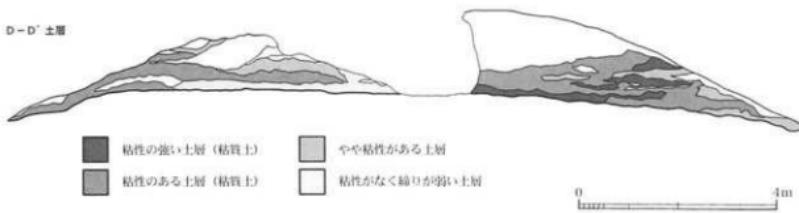
墳丘はほぼ円形で、規模は南北18.8m、東西17.5mである。高さは南西側で2.0m、北東側で3.8mである。墳頂部には南北6.8m×東西7.7mほどの平坦面を形成し、埋葬施設1～4を設けている。

墳丘の最下層は旧表土とみられる灰褐色土で、第3号古墳と同様に旧表土を基盤とし、その上に盛土をして墳丘を築いている。盛土の厚さは最大1.8m程度で、土層は上下で様相が異なる。上層(C-C' 土層8～11、D-D' 土層22・23)では一層の厚さが30～85cmであるが、下層(C-C' 土層35～43、45～53、D-D' 土層29～35、37～51、54～65、67、68)では一層の厚さが3～20cmと薄い。また、盛土下層は土手状の盛土が墳丘外縁付近で認められ、墳丘の東半及び北半で顕著である。さらに、盛土を粘性の強弱で分けた場合、粘土を多く含んだ粘性の強い土層が墳丘外縁付近で見られ、逆に粘性の弱い土層は墳丘中央で見られる。

C-C' 土層



D-D' 土層

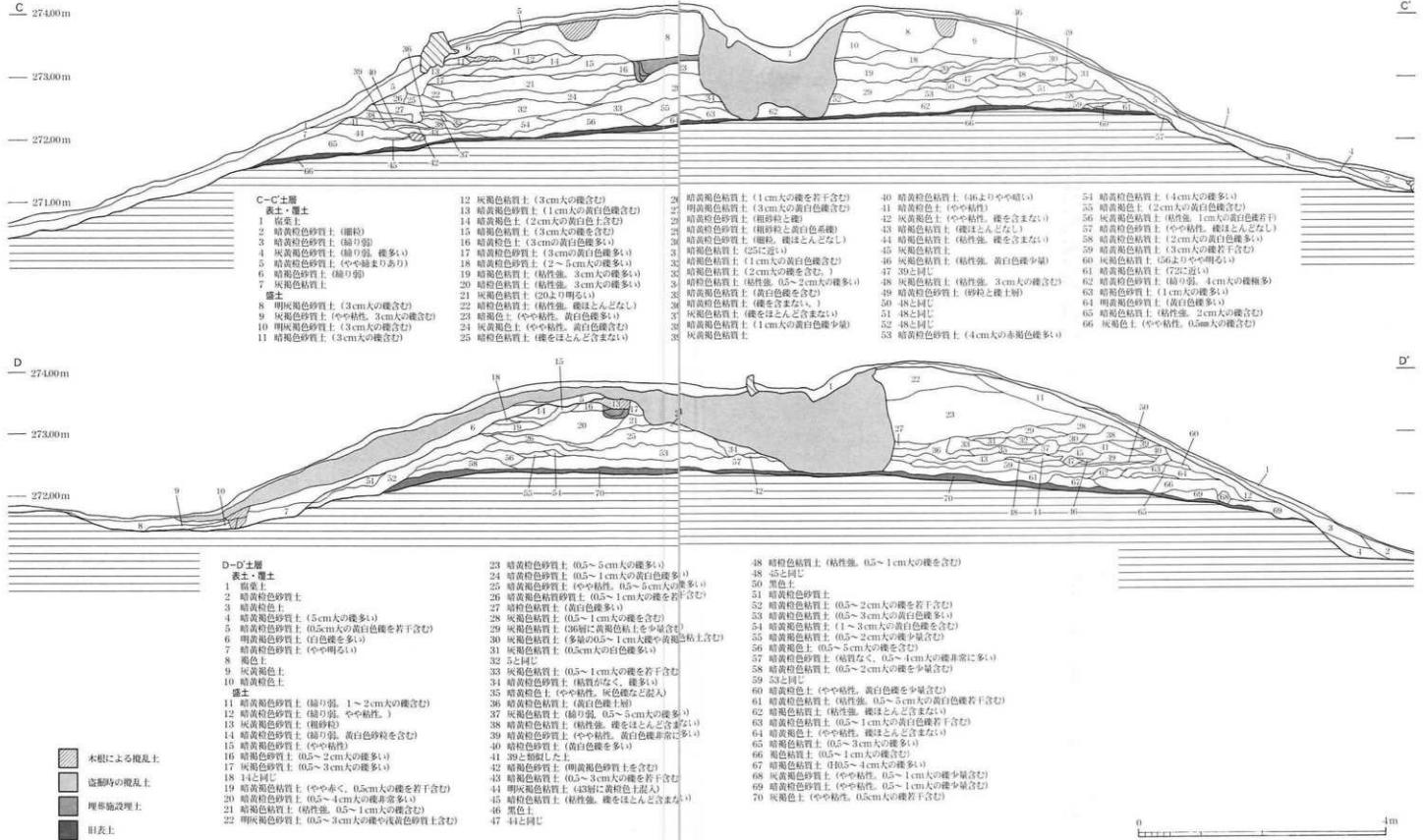


■ 黏性の強い土層(粘質土)
■ 黏性のある土層(粘質土)

■ やや粘性がある土層
□ 黏性がなく繰りが弱い土層

0 4m

第10図 下矢井南第4号古墳墳丘土層分類図(1:100)



第11図 下矢井南第4号古墳埴土刷断面図 (1:60)

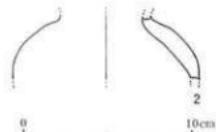
以上のことから、墳丘の構築手順としては、墳丘北東部を中心とした墳丘外周付近に粘性の強い土による土手状の盛土を施した後、その内側に粘性の弱い土による盛土を行うという工程が推測される。墳丘北東側で土手状の盛土が顕著である理由としては、墳丘北東側が丘陵斜面側にあたっており、墳丘盛土の流失を防ぐ必要があったものと思われる。墳丘上部は短期間にほぼ同一の土層で盛土を行なっているようである。

遺物は、土師器1点(2)、筒形石製品1点(25)が盜掘坑周辺の墳丘上で出土した。筒形石製品は埋葬施設1上方の盜掘坑上端際で出土した。土師器は埋葬施設3の検出面より70cm程度高い位置から出土しており、古墳に伴わない可能性もある。

出土遺物(第12図、図版16)

土師器・壺(2) 小型の壺で、胴部上半の破片である。頭部径5.3cm、胴部最大径11cm程度で、胴部上半の器壁の厚さは1cmである。

胎土には1mm大の砂粒が含まれる。色調は橙色で、焼成は良好である。
摩滅が著しく、調整は不明である。



第12図 下矢井南第4号古墳墳丘出土遺物実測図(1:3)

(3) 周溝と平坦面(第6図、図版6b・7a~7c)

周溝は墳丘の西~南側に掘削されており、墳丘全体の1/2周程度をめぐる。幅3.5~5m、深さ最大0.3mで、掘込みの傾斜は緩やかである。周溝の途切れる北から東側の墳端部には幅0.5~5mの平坦面が形成されている。この部分の掘削土を盛土に使うと共に、平坦面を設けることで墳丘の高まりを際立たせる視覚的効果を狙ったものと思われる。周溝底面は南西側が最も高く、東側の平坦面とは約1.8mの高低差がある。なお、周溝南西の平坦気味な地形は、墳丘盛土用の土を掘削した痕跡と推測される。墳丘西側の表土で須恵器片(24)、周溝埋土中層で土師器の小片が出土したが、須恵器片は古墳に伴ないと考えられる。

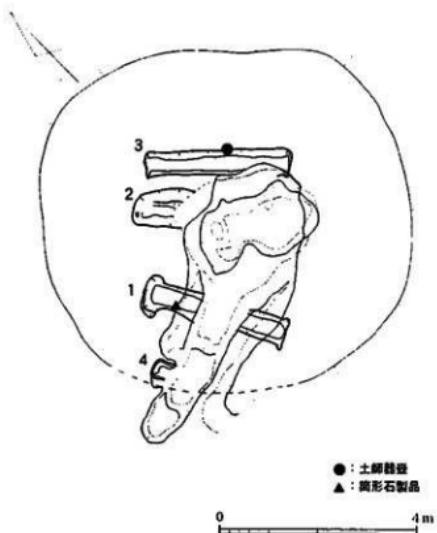


▲調査指導の様子(平成19年12月)

(4) 墓葬施設 (第6・13図)

墳頂部及び墳丘西裾部で5基の埋葬施設（粘土槨3基・木棺墓2基）を検出した。墳頂部に存在する4基は、いずれも盛土を掘込んで構築されており、表土から0.25～0.7mほどの深さで検

出した。4基とも墳丘中央部にある大きな盜掘坑によって破壊を受けており、ほぼ全体が残存していたのは埋葬施設3のみである。配置は、墳頂部の中央北寄りから北西－南東方向に4基が0.25～1.1mの間隔で並列し、重複はない。長軸方位は概ね北西－南東方向であるが、埋葬施設2・3と埋葬施設1・4で若干角度が異なっている。墳丘西裾部に存在する埋葬施設5は、盜掘坑による破壊を受けていない。盛土を掘込んで構築した痕跡が不明瞭で、墳丘基盤で検出した。長軸方位は、唯一南北方向である。

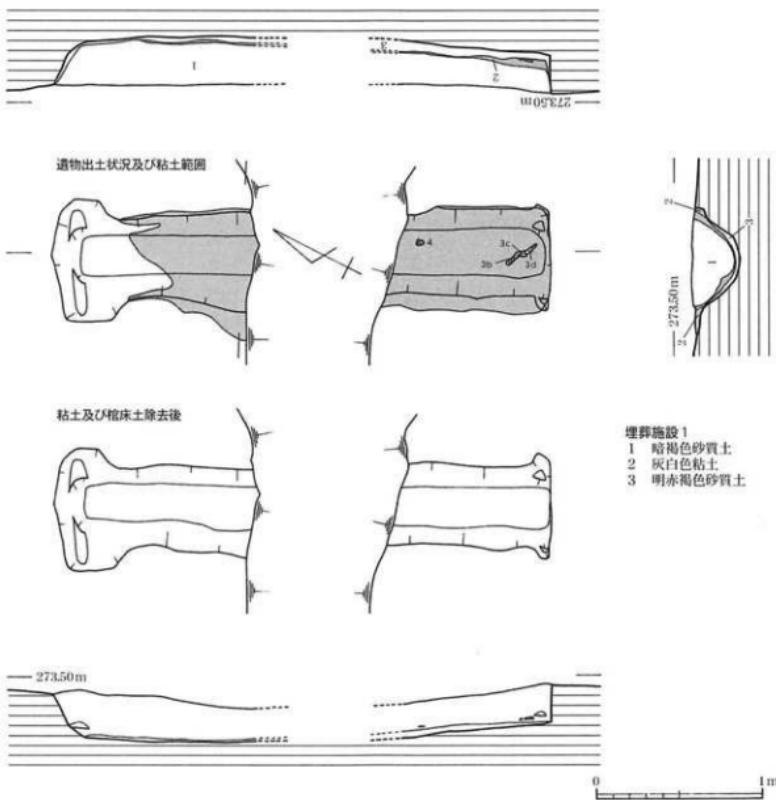


第13図 第4号古墳墳頂部遺構配置図 (1:100)

埋葬施設1(第14図、図版10a～11a)

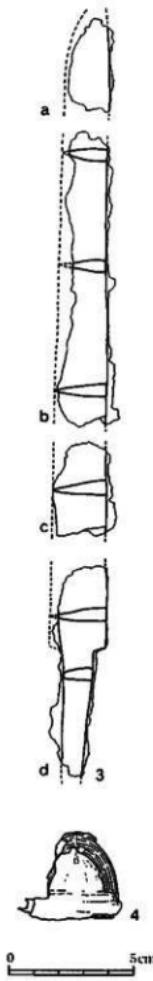
墳頂部の北から3番目に位置する粘土槨で、表土から約0.5～0.56mの深さで検出した。長軸方位はN 27° Wである。盜掘坑（幅0.8～0.94m）によって中央部が失われ、南北の両側小口部が残存する。墓坑の平面形は細長い長方形で、長さ3.02m、幅0.48～0.6mであるが、両小口部は南側で幅0.64m、北側で幅0.74mとやや拡張する。深さ最大0.25mで、底面は南から北へ傾斜する。小口の両側を掘ることで小口板を固定し、棺体を挟み込んでいる。木棺は丸味を帯びた墓坑横断面から、長さ2.9m、直径0.5mほどの割竹形木棺と推定される。土層観察によると、底面には明赤褐色砂質土、その上に灰白色粘土層が堆積している。この2層の間で遺物が出土していることや墓坑内を覆うような堆積状況から、最下層は棺床土と考えられる。粘土層は墓坑外側にも広がっており、木棺を被覆した粘土が木棺腐食によって陥没したものと推測される。粘土の厚さは最大5cmで、南端から北西に向けて薄くなり、北端では見られなかった。頭位は明確でないが、墓坑底面の傾斜状況から南東の可能性がある。

遺物は鉄刀 1 点(3)と堅櫛 1 点(4)で、いずれも棺内から出土した。鉄刀は 4 片(a ~ d)に分かれ、b ~ d は南小口付近の棺中央で、長軸に対して斜交する向きにほぼ一直線上に並んだ状態で出土し、a はその付近で出土した。b は刃部を東側に向け、c・d は刃部を西側に向けており、折れた状態で鉄刀を副葬した可能性が考えられる。堅櫛は南小口から北に 0.8m、中央やや東寄りの位置で、櫛先を北側に向けて出土した。



第 14 図 下矢井南第 4 号古墳埋葬施設 1 実測図 (1:30)

出土遺物(第15図、図版16)



第15図 下矢井南第4
号古墳埋葬施
設1出土遺物
実測図(1:2)

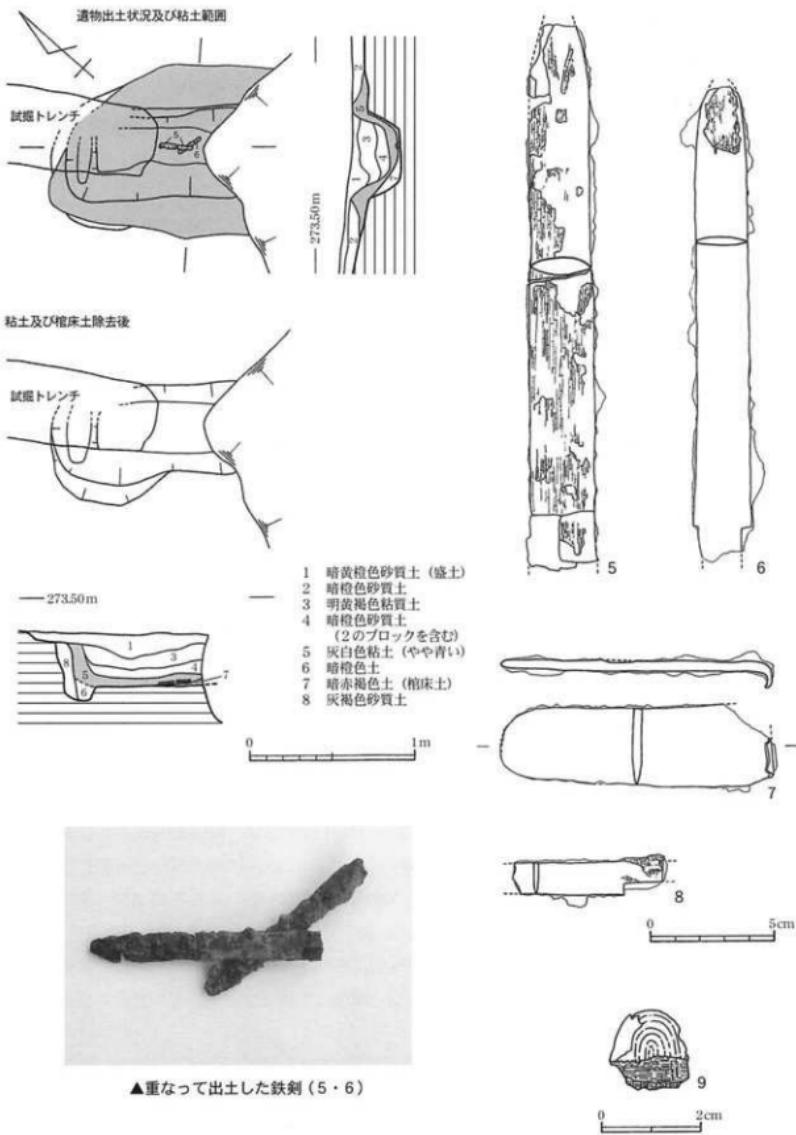
鉄刀（3） 平造りの直刀で、全長30～40cmと推定される。身部は平坦な棟が明瞭に残るが、刃部は鋸化によって大半が失われている。切先の鋸膨れが激しく、茎部も茎尻を欠損する。身部の厚さは最大0.5～0.6cmで、関付近の刀身部断面は二等辺三角形を呈する。棟間は直角であるが、刃間は剥離によって不明瞭である。茎部は残存長5cm、厚さ最大0.5cmで、棟側は平坦な面をもち、刃部側はやや薄くなる。目釘孔は確認できない。

豎櫛（4） 湾曲結歯式のもので、残存するのはムネ部の漆膜のみである。残存状態からムネ長3.5cm、ムネ幅3.9cmと推測される。厚さ約1mmの竹ヒゴを20本ほど束ねたと思われ、湾曲部の縦糸痕跡がわずかにみられる。巻き付け部は1cmほどで、その下にある櫛歯を固定する横棒の有無は確認できない。

埋葬施設2(第16図、図版11b・11c)

墳頂部のほぼ中央に位置する粘土櫛で、表土から60～70cm程度の深さで検出した。長軸方位はN° 40Wである。南半部を盜掘により壊され、北半を残すのみであるが、北端も盜掘トレンチ等によって状況は不明瞭である。墓坑の平面形は隅丸長方形と考えられ、残存規模は長さ1m、最大幅0.56mである。深さは最大0.52mで、底面はほぼ平坦である。墓坑底面は暗赤褐色土の棺床土があり、木棺を安定させている。木棺は、墓坑底面や棺床土上面の横断面が丸味を帯びることから、直径0.5mほどの割竹形木棺と考えられる。小口底面に深さ10cmほどの溝があることから、この溝に小口板を固定して棺体を挟み込み、灰褐色砂質土（8層）を裏込めとしたものとみられる。棺床土上には青味のある灰白色粘土層があり、墓坑外側にも広がっている。粘土の厚さは最大5cmで、木棺を被覆していた粘土が木棺の腐食によって陥没したものと推測される。頭位は明確でないが、わずかに北西へ傾斜する底面から南東の可能性がある。

遺物は、鉄剣2点（5・6）、鉄鎌1点（7）、刀子1点（8）、豎櫛1点（9）で、いずれも木棺底面から出土した。鉄剣2点は北小口から0.7m程度離れた木棺中央で、5が6の上に重なって出土した。5が切先を北西に向ける木棺長軸と並行するのに対し、6は切先を西に向いている。なお、刀子と豎櫛は鉄剣付近、鉄鎌は墓坑北端に入れた試掘トレンチ内からの出土であるが、詳細な位置は明らかでない。なお、豎櫛は9と別個体とみられる破片も出土しており、2～3点を副葬していた可能性がある。



第16図 下矢井南第4号古墳埋葬施設2及び出土遺物実測図 (1:30, 1:2, 1:1)

出土遺物(第16図、図版16)

鉄劍（5・6）5は身部の破片で、刃先を欠く。現存長は21.8cm、最大幅は約2.6cmである。厚さは最大0.65cmで、鍔は明確ではない。鞘の木質が良好な状態で残存する。6は基部の大半を失い、切先もわずかに欠く。身部は現存長19cm、最大幅2.4cm、厚さ0.35cm、鍔はみられない。直角の両闇で、闇幅は3mm・4mmと不揃いである。茎部は残存長1.4cm、最大幅1.8cmで、目釘孔は確認できない。なお、切先付近に鞘の木質がわずかに残る。

鉄鎌（7）刃部がほぼ完存する直刀鎌である。直線的な外形で、先端は曲線を描く。全長11cm、幅3.2cm、厚さ0.4cmで、幅は基部に向けてわずかに広がる。基部を直角に折り返し、着柄部としている。

刀子（8）刃部と茎尻の半分以上を欠く破片である。刃部の残存規模は長さ4.5cm、幅1.3cm、厚さ0.2cmで、闇は直角の刃闇である。茎部は長さ1.4cm、幅0.9cmで、下端には柄の木質がわずかに残存する。

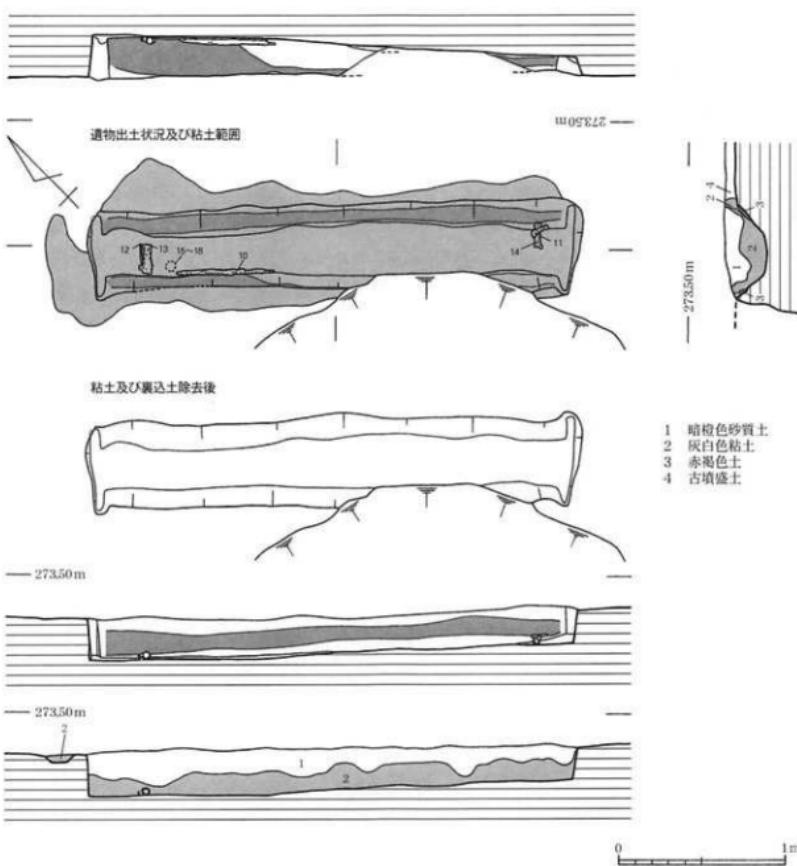
豎櫛（9）湾曲結歯式の豎櫛で、残存するのはムネ部の漆膜のみである。残存状態からムネ長1.55cm、ムネ幅1.7cmと推測されるが、ムネ部の外縁が剥落した可能性もある。厚さ約1mmの竹ヒゴ7～8本を束ねており、縦糸は不明瞭であるが、幅5mmほどの樹皮で巻き付けている。巻き付け部の下にある横棒の有無は確認できない。

埋葬施設3(第17図、図版12a～13c)

墳頂部の最も北寄りに位置する粘土櫛で、表土より約0.6mの深さで検出した。長軸方位はN44°Wである。南西の一部を盗掘坑に壊されるが、埋葬施設の中では最も残存状況が良好である。墓坑の平面形は細長い長方形を呈し、両小口が両側にやや拡張する。墓坑の規模は長さ3.0mで、幅は中央で0.5m、南小口で0.56m、北小口で0.54mである。長辺を60°～70°で掘込むのに対し、短辺は垂直気味に掘込んでいる。深さは最大0.25mで、底面は南から北へ緩やかに傾斜する。底面プランは両小口が突出したI字状となり、0.23～0.32mの底面幅が南小口では0.51m、北小口では0.48mになる。側面を掘込むことで小口板を固定させ、棺体を挟みこんだものと想定される。木棺は墓坑の規模やU字状の横断面から長さ2.9m、直径0.5mほどの割竹形木棺と考えられる。土層観察では埋葬施設1・2のような棺床土がないが、木棺を直接据え置いて側面と墓坑との隙間に赤褐色土を詰めた様子が窺える。最下層は厚さ4～14cm程度の灰白色粘土で、南から北にかけて万遍なく堆積している。墓坑外側にも粘土が広がっており、木棺を被覆した粘土が木棺腐食によって陥没したものと推測される。頭位は明確でないが、墓坑底面の傾斜状況から南東の可能性がある。

遺物は、鉄劍1点(10)、鉄鎌1点(11)、刀子1点(12)、鉄斧2点(13・14)、豎櫛4点(15～18)で、いずれも木棺の底面で確認した。鉄劍は、北小口から0.5mほど離れた地点で木棺の南西側下端に沿って、切先を北西に向けて出土した。刀子と鉄斧(13)は、北小口から0.3mほど離れた地点の木棺中央やや北西寄りに位置し、刀子の南隣に鉄斧を並列させた状態で出土した。

木棺長軸に対し垂直に配置しており、刀子は刃を下向きに、切先を北東に向ける。鉄斧は袋部接合面を下向きにし、刃を南西に向ける。豊櫛は刀子・鉄斧と鉄劍のほぼ中間で出土した。鉄鎌と鉄斧（14）は、南小口から0.2～0.25mほど離れた地点の木棺底面東側で、鉄斧の上に鉄鎌を重ねた状態で出土した。鉄斧は袋部接合面を上にして刃を北東に向け、やはり木棺長軸に直交した配置となっている。一方、鉄鎌は基部の折り返しを下にして刃先を東に向けるため、木棺長軸に対して東に偏る。しかし、鉄鎌基部の木質の状況から柄が鈍角に着いていたと想定され、鉄鎌の柄を鉄斧と並行させ、木棺長軸と直交方向に配置したと推定できる。



第17図 下矢井南第4号古墳埋葬施設3実測図(1:30)

出土遺物（第18図、図版16・17）

鉄劍（10） 身部はほぼ完存しているが、刃先は摩耗して丸みを帯びる。茎部も茎尻を失っており、残存長は55.4cmである。身部は長さ49cmで、刃先から関部に向けてやや幅を増し、最大幅2.9cmである。厚さは0.6cmで、鎬はみられない。関部は内湾しながら茎部に繋がる。茎部は残存長6.4cmで、身部との境から徐々に幅を減じ、最小幅1.3cm、厚さ0.3cmである。目釘孔は確認できない。身部では部分的に鞘の木質が確認できる。

鉄鎌（11） 直刃鎌で、刃の先端と背側の基部の一部を欠く。残存長11.1cm、刃部幅2.2～3cm、厚さ最大0.3cmで、刃部は使用によって摩耗している。基部は一部を欠損するが、折り返して着柄部としており、木質は約110°の着柄角度で付着している。

刀子（12） 刃先と茎尻を欠く破片である。比較的残存する棟側に対し、刃部側の鋸化が激しく、ほとんどが剥離・欠損している。残存長14.8cm、刃部最大幅1.9cmで、身部及び茎部の厚さは共に最大0.3cmである。目釘穴は確認できない。

鉄斧（13・14） いずれも無肩有袋の鉄斧で、袋部は鉄素材を薄く叩きのばして折り返している。13は平面形が長方形状で、袋端部より刃先に向かって徐々に幅が広がる。刃先の両端は丸みを帯びるが、ほぼ直線である。全長は17.3cmで、刃部幅6.0cm、袋部幅4.7cmである。袋部上端部の断面は楕円形で、内径は4.0cm×2.6cmである。合わせ目は袋端部付近で若干接するのみで、大半は密着しない。体部の厚さは最大1.3cm、袋部の厚さは0.4cmである。重量は598.84gである。

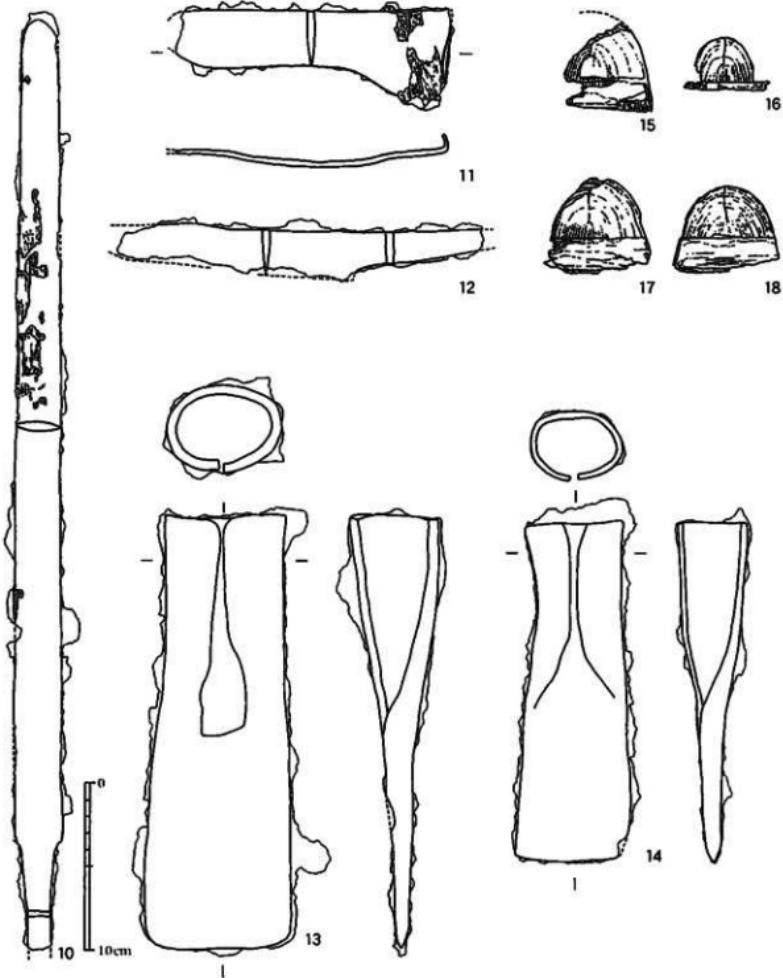
14も平面形が長方形状で、袋端部より刃先に向かって徐々に幅が広がるが、袋部中央でややくびれる。刃先はわずかに弧を描くものの、直線的である。刃先の片側が一部欠損しており、使用による欠損と考えられる。全長13.5cmで、刃部最大幅4.5cm、袋部幅3.9cmである。袋部上端部の断面は内径約3.5cm×2.3cmの楕円形を呈し、合わせ目は全く密着しない。体部の厚さは最大0.9cmで、袋部の厚さは0.3cmである。重量は239.05gである。

豎櫛（15～18） 湾曲結歯式の豎櫛で、4枚が密着して出土した。上から15→16→17→18の順で重なっており、密着状態での厚さは約0.45mmである。いずれもムネ部の漆膜のみで、残存

状態が良好な17・18に対し、16は大部分が失われている。残存状態から推測される大きさは、ムネ長3.5～3.7cm、ムネ幅4.3～4.6cmで、極端な格差はない。厚さ約1～1.5mmの竹ヒゴ15～20本ほどを束ねたとみられ、16～18には縫糸の痕跡が微かにみられる。確認できた巻き付け部はいずれも約1cmで、15・17は樹皮を使用している。15・17・18は巻き付け部下の櫛歯を固定する横棒の痕跡が確認できる。

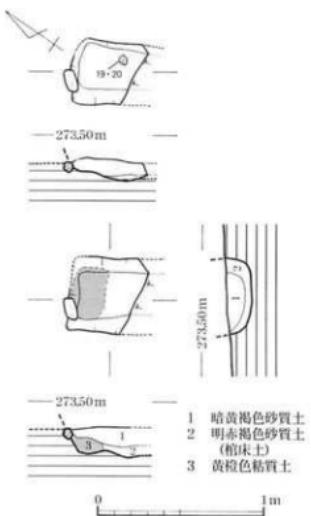


▲4枚が重なった状態の豎櫛



第18圖 下矢井南第4号古墳埋葬施設3出土遺物実測図 (1:3, 1:2)

埋葬施設4 (第19図、図版14a)



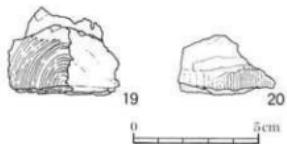
第19図 下矢井南第4号古墳埋葬施設4
実測図 (1:30)

墳頂部の最西端に位置する木棺墓で、表土から約25cmの深さで検出した。長軸方位はおよそN 30° Wである。大半が盜掘坑によって破壊され、墓坑上方の土層も木根による擾乱を受けており、北小口付近の下方部のみを確認した。上層の土層からみて、盛土上方から墓坑を掘下げたものと考えられる。墓坑の周囲や内部に粘土を確認できなかったことから、木棺直葬と考えられる。墓坑の平面形は長方形で、規模は残存長0.4m、幅0.44mである。盜掘坑内に墓坑の痕跡が残存しない状況から、墓坑の長さは1m未満と推測され、子どもの被葬者が想定される。深さ0.15mで、底面は概ね平坦であったと思われるが、礫を多く含む土層となっているため凹凸が目立つ。土層観察によると、墓坑底面に棺床土を入れ、木棺を墓坑の西側に寄せて据え置き、東側にも棺床土と同じ土を充填している。木棺痕跡の規模は残存状態で長さ0.4m、幅0.35m、深さ0.11mで、U字状の横断面を呈することから割竹形木棺が使用されたと考えられる。木棺を取り囲む土は明赤褐色に変色しており、木棺内部に赤色顔料を塗布していた可能性がある。ただし、小口壁面とそれに続く底面(長さ0.14m×幅0.29m)には赤色顔料がなく、そこには黄橙色粘質土の塊が確認できた。かなり粘性が高く、その位置から木棺小口部を固定した粘土塊の可能性がある。遺物は豎櫛2点(19・20)で、北小口から0.27m離れた北東壁付近の木棺底面で出土した。櫛先は西方向に向けていた。

出土遺物 (第20図、図版17)

豎櫛(19・20) 共に湾曲結歯式の豎櫛で、漆膜のみが残存する。19は巻き付け部から上側の破片で、上方の膜が捲れている。残存状態での長さは3.0cm、幅は4.5cm程度である。20は巻き付け部付近の破片で、残存状態で長さ2.4cm、幅3.9cmである。この2点は大きさや形状から同一個体と考えられる。

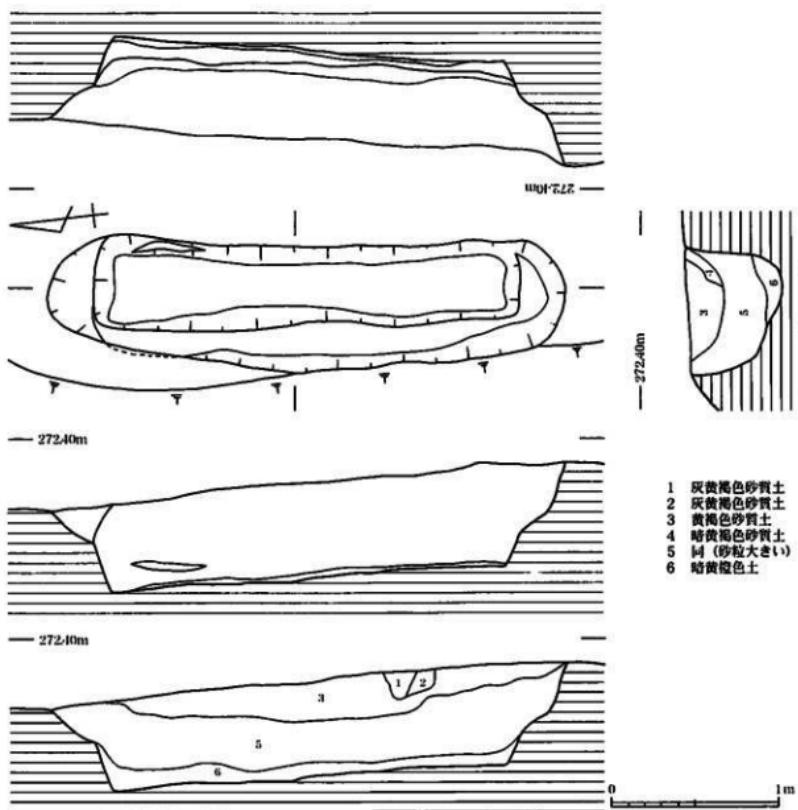
脆弱のため接合は難しいが、残存状態からムネ長3.7cm、ムネ幅4.8cmの豎櫛と推定される。厚さ約1mmの竹ヒゴを22本ほど束ねて櫛歯としている。縦糸は不明瞭で、巻き付け部も残存状態が悪いが、樹皮を使用しているものと思われる。巻き付け部の下にある櫛歯を固定するための横棒は確認できなかった。



第20図 下矢井南第4号古墳埋葬施設4
出土遺物実測図 (1:2)

埋葬施設5（第21図、図版14b・14c）

墳丘西側斜面の裾部付近に位置する木棺墓で、墳丘盛土を除去した際に検出した。長軸方向はN 7° Eである。墓坑の平面形は両小口が丸い長方形で、長さ3.13m、最大幅0.75m、深さ最大0.46mである。底面は南側が北側より0.3mほど高く、東側に寄せて木棺を据え置くための掘り方を設けている。掘り方の平面形は狭長な隅丸長方形で、長さ2.56m、幅は南小口付近で約0.4m、北小口付近で0.48mである。深さは北部で最大0.12mである。底面付近に棺床土ではなく、横断面がU字状を呈することから、長さ2.35m、直径0.45mの割竹形木棺が据え置かれたと考えられる。頭位は底面の傾斜を考慮すると南と考えられる。遺物は出土していない。



第21図 下矢井南第4号古墳埋葬施設5実測図(1:30)

(5) 盗掘坑 (第6・13図、図版9b・9c)

墳丘のほぼ中央にあり、南北2.0m、東西2.6m、深さ1.7mで、さらに西方向へ幅1.2～1.8mの通路状に掘込まれている。底面は基盤土まで達し、埋葬施設3の一部と埋葬施設1・2・4の1/3～1/2を壊していた。底面付近から鉄刀1点、鉄剣1点、鉄斧2点がまとまって出土し、出土位置や付着した青味のある灰白色粘土から埋葬施設2の副葬品である可能性が高い。盗掘坑上端際で出土した筒形石製品1点(25)は、盗掘によって跳ね上げられたものと考えられる。

出土遺物(第22図、図版17)

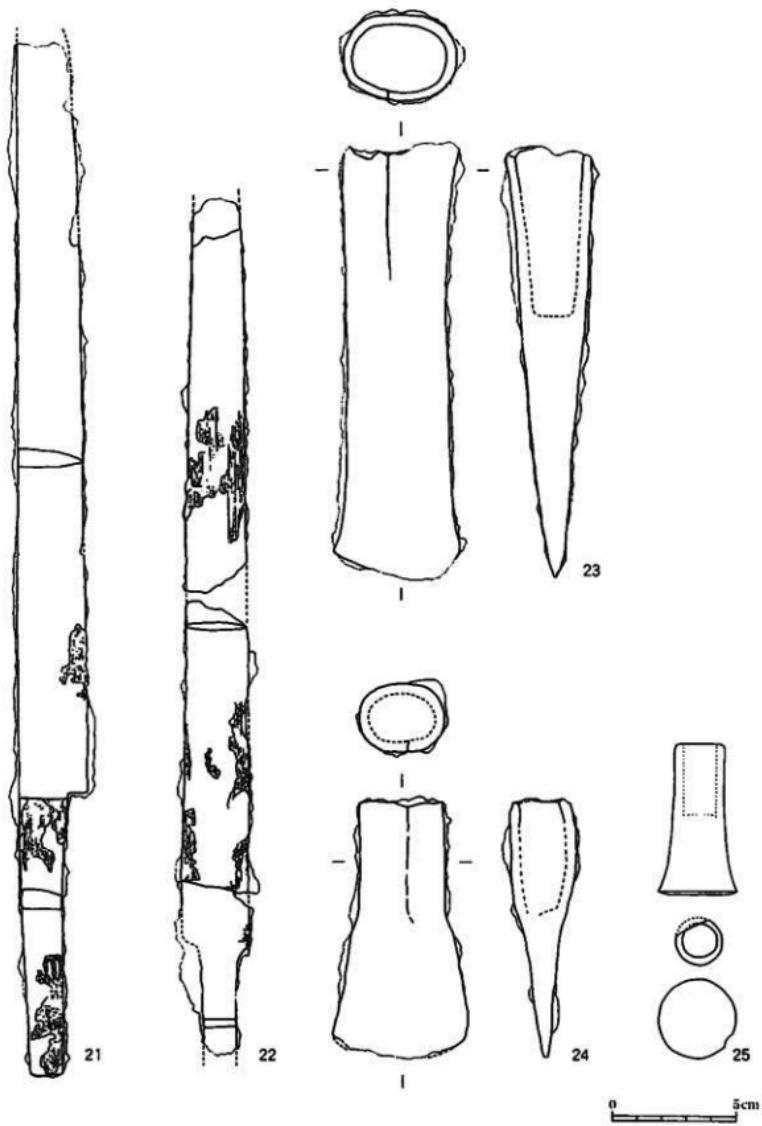
鉄刀(21) 平造りの直刀で、刀身を一部欠損するが、茎部と茎部に近い刀身の残存状況は良好である。身部は残存長29.7cmで、中間の幅は2.8cm、厚さは最大0.7cmである。直角の刃闇で、闇幅は8mmである。茎部は長さ11.3cmで、幅は1.3～2.0cmで、厚さは0.8cmである。身部の刃先付近と茎部に木質が残存しており、鉄刀の長軸に沿った木目から鞘と把の一部と考えられる。目釘孔は確認できなかった。

鉄剣(22) 4片からなり、切先や茎尻を失うため、全長は不明である。身部は残存長約29.5cmで、幅は闇部に向け徐々に幅を増し、最大幅は2.7cmである。厚さは最大0.3cmで、鏽はみられない。闇部は片側が矩形で、もう一方は浅く内湾する。茎部は残存長4.5cm、幅約1.5cm、厚さ最大0.3cmである。身部及び闇の部分には木質が残存しており、木目が鉄剣の身部に平行していることから、鞘の一部と考えられる。目釘孔は確認できなかった。

鉄斧(23・24) 23は無肩有袋の鉄斧である。平面形が長方形で、刃部はわずかに幅が広がる。全長17.4cm、刃部幅5.1cm、袋部幅4.6cmである。袋部は合わせ目が密着し、外面からでは合わせ目部分が確認できない。袋部上端部の断面形は梢円形で、内径は2.7cm×3.8cmである。体部の厚さは最大2.6cmで、袋部の厚さは0.4cmである。縦断面はきれいな左右対称を呈しており、鉄板材を筒状にして閉じ合わせを密着するように作製した袋部と別個に作製した体部を接合したものと考えられる。刃先は浅い弧を描くが、図面上中央から左側に劣化・摩耗が著しく、左側を下にして伐採を繰り返した痕跡と想定される。重量は708.97gである。

24は有肩有袋の鉄斧である。平面形は袋部から徐々に幅を広げる台形状で、袋端部から4～4.5cmのところでわずかに肩が張る。全長10.3cmで、刃部幅5.5cm、袋部幅3.5cmである。袋部の折り返しの両端は密着し、外面からわずかに密着部分が確認できる。袋部の断面形は梢円形で、内径は1.9cm×2.7cmと推定される。体部の厚さは最大1.8cmで、袋部の厚さは0.4cm程度である。21と同様に縦断面が左右対称に近く、別個に作製した袋部と体部を接合した可能性がある。刃先はほぼ左右対称に弧を描き、わずかに破損している。重量は276.04gである。

筒形石製品(25) 円筒形状の石製品で、下に向かってやや広がる。長さ6.0cm、直径は上径が1.85cm、下径が3.1cmである。底面は0.1cmほどの膨らみがあり、球面をなす。上方から下方に向かって、直径1.4cm、深さ2.8cmの穿孔がある。孔底周縁には幅0.15cm、深さ0.1cmの周溝がある。孔内に遺存物はなかった。外面は滑らかで光沢があり、青味を帯びた淡緑色を呈する。石材は緑色凝灰岩で、重量は44.87gである。



第22圖 下矢井南第4号古墳盜掘坑内出土遺物実測図 (1:2)

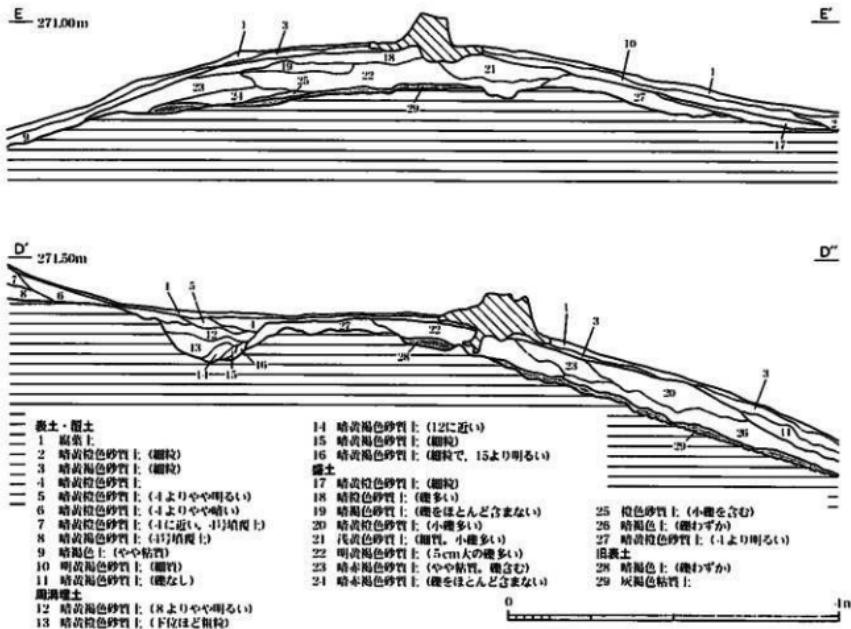
3 第5号古墳

(1) 立地と調査前の状況(第5図、図版15a)

第4号古墳の東側に近接して位置し、尾根頂部から東に延びる尾根上（標高270.98m.）に立地する。調査前の観察では橢円形を呈する墳丘の高まりが認められた。

(2) 塙丘(第6・23図、図版15b・15c)

墳丘は楕円形を呈し、規模は南北方向9.6m、東西方向6.8mである。墳頂は標高270.76mで、墳丘の西側に偏る。墳丘の高さは周溝底面で0.52m、墳丘北東裾部で1.6mである。盛土の大半は流失して最大0.5mしか残存せず、墳丘は低平である。土層観察によると、最下層の褐色系土(28・29層)は旧表土で、南側の旧表土等を削って谷側斜面に盛ることで基盤を整え(26層)、その上に周溝掘削土等を盛っている。手順は黄橙・赤褐色系土(23・24・27層)を土手状に盛って、その内側に礫の多い黄褐色土(22層)と砂質の黄色・暗褐色土(19・21層)を順次充填し、再び礫の多い橙・黄橙色土(18・20層)で被覆しており、第3・4号古墳とほぼ共通する工法である。埋葬施設は盛土と共に流失したものと思われるが、周囲に石の散乱がないことから木棺又は土坑の可能性が高い。墳丘からの出土遺物はない。



第23圖 下矢非南第5号古墳埴丘土層断面図(1:60)

(3) 周溝 (第6図、図版15b・15c)

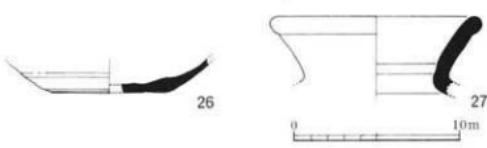
周溝は、墳丘西側を中心に墳丘全体の1/2周程度をめぐる。西から東に向かって傾斜する尾根上に立地していることから、墳丘西側の背後斜面を掘込んで周溝を構築しており、東に向かって自然消滅する。周溝の規模は幅1.2～2.7m、深さは最大0.52mである。墳丘西側の周溝埋土中～下層内から土師器の小片が出土しており、墳丘頂部からの流れ込みとみられる。

4 調査区内出土遺物 (第24図、図版17)

第4号古墳南西側の表土から須恵器1点(26)、調査区北西の表土から須恵器1点(27)が出土した。

須恵器・杯身(26) 底部の破片で、復元底径は7.0cmである。平底の底部に外上方に直線的に延びる体部が付く。体部内外面および底部内面に回転ナデを施す。底面外面は回転ヘラ切りである。色調はやや黄色を帯びた青白色で、体部内外面は赤褐色を帯びる。胎土に1～2mm大の褐色砂粒を多く含む。

須恵器・壺(27) 口縁～頸部の破片で、復元口径12.0cm、頸径は8.6cmである。頸部は体部からくの字状に伸び、口縁端部を丸く納めている。外面は回転ナデを施している。色調は明青灰色で、胎土に1～2mm大の褐色砂粒を含む。



第24図 調査区内出土遺物実測図 (1:3)



▲粘土標検出の作業風景

第4表 出土遺物観察表(土器)

※法量は全て復元量

番号 番号	追構	種別	器種	法量(最大値/cm)				手法の特徴		胎土	焼成	色調
				口径	肩径	底径	残存高					
2	第3号古墳周溝	土師器	壺	—	11.0	—	3.8	内-ケズリ筒ナヂ?	—	褐色粘土	良好	褐色
26	第4号古墳南西側	須恵器	杯	—	—	7.0	2.0	内外-凹輪ナヂ、底-ヘラ切り筒ナヂ	精良	良好	灰青色	
27	調査区内北西	須恵器	壺	12.0	—	—	4.65	口輪-筒部-凹輪ナヂ、底部-タタキ	精良	良好	灰青色	

第5表 出土遺物観察表(鉄製品)

※()は推定法量

番号 番号	出土追構	器種	現存法量(最大値/cm, g)							備考	
			全長	刃部長	刃部幅	刃部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚		
1	第3号古墳周溝	鉄矛	6.5	—	(4.6)	—	—	3.0	—	79.49	有袋鉄矛
3	第4号古墳埋葬施設1	鉄刀	30~40	15.6	2.0	0.6	5.0	1.3	0.5	68.30	破断鉄刀
5	第4号古墳埋葬施設2	鉄劍	21.8	21.8	2.6	0.55	—	—	—	—	鈍の木質が残存
6	第4号古墳埋葬施設2	鉄劍	19.0	17.6	2.4	0.35	1.4	1.8	0.3	162.85	月先に鈍の木質が残存
7	第4号古墳埋葬施設2	鉄鍔	11.0	—	3.2	0.4	1.4	3.0	0.4	55.63	
8	第4号古墳埋葬施設2	刀子	5.9	4.5	1.3	0.2	1.4	0.9	0.2	9.78	半部に木質が残存
10	第4号古墳埋葬施設3	鉄劍	55.4	49.0	2.9	0.6	6.4	2.1	0.3	258.22	刃部に鈍の木質が残存
11	第4号古墳埋葬施設3	鉄鍔	11.1	—	3.0	0.3	—	—	—	—	鈍の木質が残存
12	第4号古墳埋葬施設3	刀子	14.8	—	1.9	0.3	—	—	—	—	27.29 細化で刃部と基部の境が不明瞭
13	第4号古墳埋葬施設3	鉄斧	17.3	—	6.0	1.3	—	—	—	—	598.84 有袋鉄斧
14	第4号古墳埋葬施設3	鉄斧	13.5	—	4.5	0.9	—	—	—	—	239.05 有袋鉄斧
21	第4号古墳埋葬施設2?	鉄刀	41.0	29.7	2.8	0.7	11.3	2.0	0.8	325.87	鈍の木質が残存
22	第4号古墳埋葬施設2?	鉄剣	34.5	29.5	2.7	0.3	4.5	1.5	0.3	135.23	鈍の木質が残存
23	第4号古墳埋葬施設2?	鉄斧	17.4	—	5.1	2.6	—	—	—	—	708.97 有袋鉄斧
24	第4号古墳埋葬施設2?	鉄斧	10.3	—	5.5	1.8	—	—	—	—	276.04 有袋鉄斧

第6表 出土遺物観察表(石製品)

番号 番号	出土追構	器種	現存法量(最大値/cm, g)					石材	備考
			長さ	上端径	下端径	孔径	孔深		
25	第4号古墳埴輪部	筒形石製品	6.0	1.85	3.1	1.4	2.8	44.87	緑色凝灰岩

第7表 出土遺物観察表(漆製品)

番号 番号	出土追構	器種	現存法量(最大値/cm)				ムネ部推定法量	構造			備考
			長さ	幅	厚さ	ムネ長	ムネ幅	縦条	巻付	横帶	
4	第4号古墳埋葬施設1	堅漆	3.55	4.2	0.1	3.5	3.9	○	—	—	
9	第4号古墳埋葬施設2	堅漆	1.6	1.6	0.1	1.55	1.7	—	樹皮	—	他に1~2点分の薄片が出土
15	第4号古墳埋葬施設3	堅漆	3.5	3.7	0.1	3.5	4.3	—	樹皮	○	残存状態は良好
16	第4号古墳埋葬施設3	堅漆	2.0	3.5	0.1	3.3+	4.9+	○	—	—	大半を欠損
17	第4号古墳埋葬施設3	堅漆	3.8	4.3	0.1	3.7	4.6	○	樹皮	○	
18	第4号古墳埋葬施設3	堅漆	3.7	4.35	0.1	3.5	4.35	○	—	○	残存状態は良好
19	第4号古墳埋葬施設4	堅漆	3.0	4.5	0.1	—	—	—	—	—	同・個体
20	第4号古墳埋葬施設4	堅漆	2.4	3.9	0.1	—	—	—	—	—	

Vまとめ

下矢井南第3～5号古墳の調査では、盗掘を受けていたが、第4号古墳で埋葬施設を確認し、筒形石製品や堅櫛のほか多くの鉄器類が出土するなど、多くの成果を得ることができた。ここで、埋葬施設や出土遺物などを県内外の類例と比較しながら、特徴や意義を考察したい。

1 墳丘

(1) 第4号古墳の墳丘規模

今回調査した古墳は全て円墳で、第4号古墳の墳丘（直径18.8m）は第3・5号古墳に比べて大きい。ここでは、第4号古墳の墳丘規模を町内の円墳と比較検討してみたい。

町内の円墳（349基）は直径4.6m～28.5mで、古墳群には概ね主墳と思われる一際大きい古墳が存在する。これらの平均直径は約12.7mで、第8表でも12mを超えると円墳数が減少し、15.5mを超えるものになると急減しており、町内では「大型円墳＝大型主墳（直径15.5m以上）」と「準大型円墳＝一般主墳（直径12～15m）」となる傾向がある。町内で15mを超える円墳は北東部3基・北西部10基・中南部1基で、単独又は3基の群構成になるものが多い。北西部では後口山第1・2号古墳（19m）、海田原第24号古墳（17m）、真御堂第1号古墳（16m）、一本堂第6号古墳（15.5m）などがあり、適度な距離を保ちながら分布している。矢井川に面した丘陵上に立地する矢井中山古墳群・下矢井北古墳群・中山古墳群に15mを超える古墳はなく、第4号古墳は矢井川流域において最大クラスの大型古墳といえる。

第8表 吉岡町の円墳規模一覧

*規模は1m単位。「～7」は「6m超、7m以下」を意味する

地区	~6	~7	~8	~9	~10	~11	~12	~13	~14	~15	~16	~17	~18	~19	~20	超	不明	合計	
北				1	3		1									1	6		
知和																			
上安田	2	1	3		6	1		2								1	3	19	
東																1	6	31	
安田		1	8	3	3	1	3	1	1	2	1					1	6		
牧	7	11	20	27	20	22	15	5	4	8	2					1	1	143	
北																			
矢井・海田原	3	3	10	11	11	5	5	1	1	3	1			3		2	62		
矢野地		7	5	11	9	5	5	2	1	2	1							48	
西																1	7	13	
三木		1	1	1		1		1								2	7		
吉岡					2	1	1	1											
中															1		2	8	
清瀬				2	1		2									3	3		
佐																	2	4	
南																2	5		
九田			1		1														
市						2		1											
合計	12	23	48	59	56	37	33	13	9	15	3	2	0	4	2	3	30	349	

(2) 墳丘構造と平坦面

第3～5号古墳は全て旧表土を墳丘基盤面として外周に土手状盛土をまず行い、その後中央の凹部を充填する工程が窺える。第3号古墳は一度上面を水平に整えた後、再びこの工程を繰り返している。第4号古墳は中央に小山状、外周部に土手状盛土を造った後に凹部を土で充填する作業を何度も繰り返して墳丘下半を固め、水平に整えた上面に埋葬施設を構築し、大量の盛土で被覆する二段階の工程が窺え、土手部に粘質の強い土を使うなど土質による使い分けも確認できる。

第5号古墳は工程の繰り返しがなく、凹部を充填する際に上面を水平面に整えようとした痕跡はみられない。第4号古墳の墳丘構築は細分化された土層が示すように緻密で、丁寧なものといえる。第3号古墳は第4号古墳ほどの緻密さはないが、大きく二段階に分けた盛土工程が共通する。それに対し、第5号古墳は二段階工程が窺えず、やや粗雑な土層から墳丘構築法が簡略化された様子が見て取れる。

このように外周に土手状盛土を行なった墳丘構造は、向江田町の権現第2号古墳及び宮の本第21・22号古墳⁽¹²⁾、西酒屋町の酒屋塚古墳⁽¹³⁾、青河町の鞍ヶ谷北第1号古墳⁽¹⁴⁾、四拾貫町の四拾貫太郎丸第2号古墳⁽¹⁵⁾、神石郡神石高原町の辰の口古墳⁽¹⁶⁾、庄原市の馬立第1号古墳⁽¹⁷⁾、安芸高田市の仁王丸第8号古墳⁽¹⁸⁾などでみられ、最寄りにある権現第2号古墳（直径約20m）は規模も近い。

第4号古墳の谷側斜面に設けた平坦面は、墳丘の区域を明確にし、高まりを際立たせる視覚的効果を狙つたものと思われる。周辺では大田幸町の五反田第1号古墳⁽¹⁹⁾、小田幸町の上定第25号古墳⁽²⁰⁾で確認できるほか、町内の片野中山第9・10号古墳⁽²¹⁾や燎東古墳⁽²²⁾でも谷側斜面を平坦気味に削平した痕跡がみられる。

（3）周溝内土坑

第3号古墳の周溝内土坑2基は、埋土に炭化物を多く含んでいた。町内の寺津古墳群や三良坂町の植松第3号古墳・見尾山第1号古墳⁽²³⁾、安芸高田市高宮町の新迫南第3・7号古墳⁽²⁴⁾、庄原市の月貞寺第28号古墳⁽²⁵⁾、福山市の石越権現第5号古墳⁽²⁶⁾などで同様の事例が確認できる。性格は明らかでないが、火を伴う祭祀痕跡と推測され、5～6世紀代の古墳が多い。

2 埋葬施設

（1）複数の埋葬施設

第4号古墳は、墳頂部に4基（粘土槨／割竹形木棺3、土坑／割竹形木棺1）、墳裾部に1基（土坑／割竹形木棺）の埋葬施設が存在する。これらは、3グループに分けられる。

A群=埋葬施設1・4（墳頂部南西に配置。主軸N27°～33°W。豎櫛・刀を副葬）

B群=埋葬施設2・3（墳頂部中央に配置。主軸N40°～44°W。豎櫛・刀劍・農工具を副葬）

C群=埋葬施設5（墳丘西裾に配置。主軸N7°E。副葬品なし）

配置や副葬品から中心的存在はB群といえ、当被葬者たちが古墳築造の契機になったと考えられる。A群は副葬品が貧弱で、主軸方位も若干ずれる。墳頂部で複数埋葬を行なった県内の前・中期古墳90例を集成・分析した梅本健治氏は、墳頂部における複数埋葬施設の配列の乱れが埋葬施設間の階層差に比例する傾向を見出し、第4号古墳をほぼ並列する配列A類としている。小規模な墓坑から小児の被葬者が想定される埋葬施設4は、粘土槨や鉄器副葬がみられないが、埋葬施設1～3とほぼ並列する配置や豎櫛が副葬されている点に被葬者間の親族的紐帯を感じられる。ただ、主軸方位における若干のズレから、A・B群間に時期差があるものとみられる。C群は墳丘外縁に沿った配置や木棺形態から第4号古墳に伴うものといえるが、墳丘裾部に配置された状況や副葬品がない点は従属的な被葬者を想定させる。

(2) 粘土櫛の特徴

粘土櫛の分類 粘土櫛は墓坑内に粘土で棺床を造り、そこに棺身を固定して遺体や副葬品を納めた後、棺蓋で蓋をして粘土で被覆するもので、竪穴式石室の省略型とされている。粘土櫛を構成する粘土は木棺への貼付工程から「棺床粘土」、「棺側粘土」、「被覆粘土」に分けられる。⁽²⁰⁾ これら3つが崩うものが本来の粘土櫛であるが、県内では被覆粘土を省略したものや棺床粘土の代わりに棺床土や砾床などを代用した「簡略化した粘土櫛」も多い。ここでは、過去に粘土櫛とされた裏込めや目張り的なもの等を除外し、簡略化されたものを含む県内の粘土櫛をまとめてみたい。整理に当たり、墓坑形態は1段墓坑で平坦な底面をもつもの(Ⅰ型)、Ⅰ型で幅が狭いもの(Ⅰ'型)、1~2段墓坑で底面に木棺を据える凹部をもつもの(Ⅱ型)に大別し、粘土形態は棺床粘土・棺側粘土・被覆粘土が崩うものの(A類)、被覆粘土・棺側粘土のもの(A'類)、棺床粘土・棺側粘土のもの(B類)、棺側粘土のみ(C類)の4タイプに分類する。

県内の粘土櫛 県内の粘土櫛は38古墳42例である(第9表)。古墳はほとんどが円墳で、方墳・前方後円墳・前方後方墳が各1基みられる。造成場所を深さの観点でみると、県南の多くが旧表土や地山を掘削して造成しているのに対し、備後北部ではほとんどが盛土内に納まっており、盛土の厚薄や工法の違いが関係しているものと考えられる。確認できた粘土形態の内訳はA類13例、A'類7例、B類4例、C類2例で、A類系が大半を占める。地域分布に照らすと、完全な粘土櫛であるA類はほぼ県南に分布し、芸南では「Ⅱ型墓坑+割竹形木棺」、備後南部では概ね「Ⅰ型又はⅡ型墓坑+割竹形木棺」となり、特に後者では3mを超える大型木棺が目立つ。これに対し、簡略化した粘土櫛であるA'類とB類は備後北部を中心に分布する。A'類は概ね「Ⅰ型又はⅠ'型墓坑+割竹形木棺」で、砾床や棺床土を伴うものが多い。B類は三次市のみ存在し、「Ⅰ型+割竹形木棺」が主流である。C類は極めて簡略化されたもので、福山市に2例が存在する。備後北部にも木棺の周りに部分的な粘土帯をもつ事例があるが、この2例は棺床土を設けた点やしっかりと木棺を囲み込んだ形態が窺え、第9表に含めた。

第4号古墳の特徴 第4号古墳の粘土櫛は3基で、盛土内に納まっている。墓坑規模は約3mと市内では平均的であるが、木棺もほぼ同規模(2.9m)である。墓坑は浅く狭長なⅠ'型。粘土形態はA'類で、四拾貫小原19-B例に類似する。被覆粘土は薄く、やや不完全な被覆状態は同じA'類の月貞寺21例でもみられる。棺床粘土はないが、埋葬施設1・2は棺床土、埋葬施設3は側面に裏込土を有している。棺床土の類例に赤羽例、側面裏込土の類例に山王4例があり、いずれも赤褐色土を利用している点に「赤色」に対する思想的背景を感じさせる。以上、第4号古墳の粘土櫛は備後や三次に特徴的な形態を示すが、墓坑に対して木棺が大きい点が特異である。

ところで、県内の粘土櫛を含む複数埋葬古墳は17例(第9表参照)あり、半数以上を三次が占める。第4号古墳と同じ「粘土櫛3+木棺2」の古墳ではなく、県内で粘土櫛を最も多くもつ古墳である。「粘土櫛+粘土櫛」2例や「粘土櫛+木棺」5例を含め、粘土櫛を有する複数埋葬古墳は埋葬施設がほぼ並列するものが多く、整列性の高さが窺える。第4号古墳も、このような傾向や複数埋葬の多い三次の地域性を示すものといえる。

(3) 割竹形木棺の特徴

木棺 5 基は全て割竹形木棺（最大長 2.9 m）で、粘土棺と土坑を埋葬の外棺施設とする。埋葬施設 1～4 の形態は岡林孝作氏の分類でいう小口部を刺り残さない貫通式の「B 類」、小口板で棺身を挟み込む「C 類」に分類される。埋葬施設 1・3 は墓坑側面、埋葬施設 2 は墓坑底面に小口板を固定する掘り込みを有し、前者は府中市の内堀山 A-1 号古墳例、後者は福山市の石錠現第 9 号古墳第 2 主体例が類似する。備後北部の割竹形木棺はほとんどが粘土棺を有するが、埋葬施設 4・5 は例外的な土坑である。また、同一墳丘内における割竹形木棺数は県内で最も多く、備後北部で最大規模であると共に唯一の B 類 C 型で、県内・備後北部で際立った事例といえる。

第 9 表 広島県内の粘土棺を有する主な古墳

No.	所在地	古墳及び 埋葬施設 規模	時期	墓域 (m) 長さ 幅	粘土棺 床 侧壁 下 分類	木棺 (m) 長さ 幅 備註	主な出土遺物	備註	文 獻
1	下矢井南 4-1	4c 初	3.02 0.60	×	○ ○ ○	1' A 剖竹 2.90 0.50	刀・鏡		
2	次南吉吉町 下矢井南 4-2	1m18.8 4c 初	1.0+ 0.56	×	○ ○ ○	1' A 剖竹 1.0+ 0.50	鏡・刀・子・斧・鏡・鏡		
3	下矢井南 4-3		3.00 0.60	×	○ ○ ×	1' A 剖竹 2.90 0.50	鏡・刀・斧・鏡・鏡		
4	次南吉吉町 寺津 3	前円 40 6c 初	5.56~					石斧 1 石器 1	1
5	次南吉吉町 磯松 1-A	円 13 6c 前	2.65 1.35	○ ○ ○	×	1 A 組合 1.50 0.50	鏡・刀	木棺 1	2
6	次南吉吉町 大和田山 2196	円 4c	3.00 2.11	○ ○ ×		II 剖竹 2.57 0.82	鏡・刀・子	第 7・蓋 1	3
7	次南吉吉町 先免 2-A	円 12	2.90 0.80		●	I 組合 1.80 0.50	刀・鏡	鏡 1	
8	次南吉吉町 先免 5-A	円 9.5 6c 前				II 剖竹 1.90 0.55	鏡・刀	石斧 1	4
9	次南吉吉町 楽寺 12-A	円 45 5c 前	1.20 0.60	×	○ ○ ●	1' A 剖竹	鏡・刀・鏡・刀・鏡		
10	次南吉吉町 楽寺 12-B	円 45 5c 前	3.00 1.00	×	○ ○ ▲	1' A 剖竹 2.40 0.40			5
11	次南吉吉町 四捨賀原 19-B	円 26 5c 前	3.00 0.97	○ ○ ×	×	1' B 剖竹 2.20	刀・刀・子		6
12	次南吉吉町 四捨賀原 8-B	円 18 5c 前	3.30 1.30	○ ○ ×	×	1' B 剖竹 2.00 0.40	刀・刀・鏡		7
13	次南吉吉町 四捨賀原 61-A	円 11 5c 前	3.18 1.00				鏡・刀・鏡・刀・鏡・鏡		
14	次南吉吉町 四捨賀原 80-N	円 24 5c 前	3.40 2.10			II 剖竹 2.20 0.50	鏡・刀・鏡		8
15	次南吉吉町 四捨賀原 28	円 20 5c 前	2.70 0.45	○ ○		I 組合 0.40			9
16	次南吉吉町 楽寺 1	円 18.5 5c 前	2.70 1.00						
17	次南吉吉町 楽寺 11-A	前方 34 5c 前	2.70 1.00					鏡・刀・鏡・刀・鏡	9
18	次南吉吉町 大久保 5	円 22.5 5c 前~中	3.20 1.20	○ ○ ×	×	1' B 剖竹 2.54 0.45	鏡・刀・号柱形石質品		10
19	次南吉吉町 花園 22	円 6 5c 代	0.50*				0.50		11
20	庄原市大村町 原貞寺 2	左方 7.5 5c 代	3.12 2.20	×	○ ○ ×	II A 剖竹 2.10 0.40	なし		12
21	庄原市大村町 坡造 A-3 1	円 14 5c 前	1.36 1.31	○ ○ ○	×	II A 剖竹 3.40 0.40	なし		13
22	府中市元町 坡造 A-3 2	円 14 5c 前	3.18 1.12	○ ○ ○	×	I 組合 3.10 0.45	鏡・刀・鏡・刀・鏡		
23	福山市新町町 沙曾 3	5c	3.10 1.25	○ ○ ×	×	1' C 組合 2.10 0.30	なし	木棺 2	14
24	福山市新町町 石塚 2	円 16 4c 末~ 5c 初	2.88 1.01	○ ○ ○	×	1 A 剖竹 2.00 0.45	刀・刀・号柱形石質品		15
25	福山市駅東町 鹿理 3	円 16 4c 末?					なし		16
26	福山市駅東町 谷才 4-A	円 15.6 5c 代	3.75 1.60	○ ○ ○	×	II A 剖竹 2.50 0.40	なし	石斧 3	17
27	福山市神辺町 逸之坊 1	円 17 4c 代?					鏡・刀		18
28	福山市神辺町 国成	円 13 中期			×	○ ○ ●	1' A 剖竹 3.10 0.60	鏡・刀・鏡・刀・化粧鏡	
29	福山市神辺町 鹿山 1	円 28 5c 前	5.20 3.00	○ ○ ○	×	II A 剖竹 3.60 0.50	刀・刀・鏡・刀・鏡 刀・刀・鏡・刀・鏡		19
30	福山市神辺町 鹿羽	5c 前	3.63 1.98	×	○ ○ ○	II C 剖竹 2.80 0.40	刀・刀・刀・刀		20
31	福山市神辺町 内水越 3	円 16					1.75 0.35	なし	
32	福山市神辺町 鹿王原 2		2.20 0.40	○				鏡・鏡	21
33	原原 1	円 36.5 5c 代						上鏡毛手	
34	原原 1 原原 8-B	円 10 5c 代						鏡・刀・刀・刀・鏡	4
35	原原 1 原堀谷 2	円 13.9 5c 代						鏡・刀・鏡・刀・化粧鏡	
36	原原山田西町 鹿原 1	円 11 5c 中	2.25 0.65	○ ○ ○	×	1' A 剖竹 1.75 0.40	刀・刀		22
37	東広島市吉田町 山王 4-SK1	円 11 5c 中	3.21 1.10	○ ○ ○	×	II A 剖竹 2.10 0.45	刀・刀		
38	東広島市吉田町 山王 5-SK1	円 15 5c 中	3.75 1.60	○ ○ ○	×	II A 剖竹 2.50 0.45	なし	石斧 2	23
39	東広島市吉田町 鶏ヶ進 1-1	円 10 4c 末	3.72 1.90	○ ○ ○	×	II A 剖竹 2.10 0.50	鏡・刀	石斧 2	24
40	東広島市吉田町 鶏ヶ進 2	円 10 5c 前	3.35 1.15	○ ○ ○	×	II A 剖竹 2.50 0.50	刀・刀		24
41	広島市安佐北区 道川 1	円 7 5c 代	3.50 2.10	○ ○ ○	×	II A 剖竹 2.75 0.70	刀	木棺 1?	25
42	広島市北区 金里向山	前円 33 前円 34	7.00 2.30	○ ○ ○	○	II A 剖竹			26

※古墳及び埋葬施設 2 は、当該調査報告書での表現をそのまま用い、略している。（例：鹿原 12-A = 作番 12 号古墳 1 主体）
略記例や記号は、「×」= 本棺、「X」= 黒し、「—」= 未記載とし、下線のある数値は筆者計算値である。その他は下の通りである。

形態・規模：「円」= 円形、「四角」= 四方後円形、「前円」= 前方後方形
棺材：「A」= 檀木棺材、「側」= 割竹棺材、「鶏」= 鶏竹棺材、「下」= 埋入下彫の棺材構造

木棺：「割竹」= 割竹形木棺、「刀」= 刀子木棺、「子」= 子棺、「鏡」= 鏡棺の構造品
遺物：「刀」= 刀、「鏡」= 鏡、「石斧」= 石斧形石器、「石刀」= 石刀上彫、「石鏡」= 石鏡上彫

※現在、古墳名が変わった古墳は、浄善寺 12-A 号古墳（浄善寺第 12 号古墳）、四捨賀原 19 号古墳（四捨賀原 19 号古墳）、四捨賀原 28 号古墳（四捨賀原 28 号古墳）、四捨賀原 31 号古墳（四捨賀原 31 号古墳）である。
※上記以外に粘土棺の可能性がある古墳に、跡べら第 1 号古墳、跡べら第 2 号古墳（原原市）がある。

3 出土遺物

(1) 簡形石製品

これまでの研究 第4号古墳から出土した簡形石製品は全国約40例、県内では初例の希少な石製品で、「栓型石製品」「卷軸形石製品」と呼称されたものもある。形態は玉杖鐵部に由来するとみられ、極端な相違はない。用途・性格は「ヤリやホコの石突」「棒状物の下端」「筒形銅器の石製化」など諸説があるが、組み合うべき遺物がなく、孔に棒状のものを刺した痕跡がみられないものもあり、鈴木裕明氏は「玉杖の本来の鐵部形態から離れ、その器物自体が象徴性をもつものとして単独で副葬されるようになった」と推論した。現在、玉杖杖頭部が共伴しないものや玉杖上頭部との組み合わせが明瞭でないものを「簡形石製品」と呼んでいる。

玉杖鐵部の変遷 鈴木氏によると、簡形石製品のルーツとされる奈良県・桜井茶臼山古墳の玉杖鐵部は、同県・勝山古墳の圓筒形木製品の鐵部を祖形とするものとされ、特徴として「裾広がりの形態」「最大径部に巡る面取り」「丸味の強い底面」「貫通する孔」があげられる。伝松阪例もそれを継承するが、次に登場する伝奈良県例①やメリ山例は段や凹線など筒形石製品に通底する要素が現れ、特に両端から未貫通の孔が穿たれたメリ山例(No.38)は、玉杖鐵部からの乖離現象を示す様相とみられている。後出する赤土山例や時期不明の関西大学例も、共伴する玉杖杖頭部と組み合った痕跡がなく、面取りもない。さらに、赤土山例は孔が貫通するものの直線的な外形で、関西大学例も極めて孔が浅く、共に筒形石製品とみられている。

筒形石製品と出土古墳 簡形石製品は長さ3.4~9.5cmで、大半が縦長であるが、一部ヌク谷北塚例のような短小のものもある。形状は細かくみると差異があるが、全て上端から下端に向開き、概ね孔が貫通しない。石材は水晶製・滑石製各1点を除き、大半が碧玉製である。出土数は概ね1~2個であるが、新沢千塚例(7個)、新山例(5個)のような事例もある。

出土古墳(加美例は方形周溝墓とされる)は奈良県・大阪府を中心に東は岩手県、西は広島県まで広く分布するが、畿内以東に多く、西日本に多い筒形銅器と対照的である。古墳は円墳(18.8~45m)又は前方後円墳(71~250m)で、築造時期は4世紀代を中心とし、5世紀初頭までに納まっている。埋葬施設は竪穴式石室・粘土構のみで、刀剣類の他に鏡や石鉗・車輪石・鐵形石などの碧玉石製品、石製模造品などが目立つ。

形態の分類 次に、玉杖鐵部を含む筒形石製品の形態分類を試みたい。外形を稜や段を持つ「I類」、稜や段がない「II類」に分け、丸い底を「A」、平坦な底を「B」とする。さらに、孔の深さが明らかに全長の1/2未満のものを「1」、1/2前後のものを「2」、1/2を超えるものを「3」、貫通するものを「4」とし、孔深レベルを表す数値とする。

形態が確認できた筒形石製品及び玉杖鐵部42例は、IA類10例・IB類12例・IIA類12例・IIB類8例に分かれ。I類はB類がやや多く、逆にII類はA類が多くなる。深さ4に属する8例は全て玉杖鐵部か玉杖杖頭部等を伴う筒形石製品で、これらを除くとIA・IIA類は深さ1~2、IB類は深さ3が大半で、IIB類は深さ1~2と3が同数となり、A類は1・II類とも1/2以内、B類は1/2を超える深さとなる傾向が窺える。

地域的にはⅠB類がやや東日本寄りに分布し、大阪はⅡ類が目立つ。しかし、孔の深さが様々な上に、新沢千塚例や熊野神社例のように異なる形態が混在するものもあり、地域性や時期的変遷を明らかにするのは難しく、出土古墳の先後関係の整理と併行した検討が必要である。

下矢井南例の位置付け 下矢井南例はⅠA2類に属し、丸味の弱い底面や径の大きい孔が特徴である。形状は和泉黄金塚例(No.29)に最も類似し、大きな穿孔は赤土山例に近い。穿孔底部周縁に巡る細い溝は穿孔作業に伴う痕跡と思われ、新沢千塚例・新山例・向山例・弁天山例などで確認できる。出土例としては最西端で、古墳規模も最小である。副葬品も明らかに少ないが、鉄劍と鉄刀が共存するⅠA類出土古墳の傾向に同じで、上殿例・和泉黄金塚例・金藏山例などと同じく農工具や堅拂などを含んだ組成がみられる。

第10表 全国の筒形石製品及び玉杖頭部を出土した古墳及び遺跡(文献45)

No.	所在地	古墳名	地形 距離(m)	埋葬 施設	西面	出土 場所	直徑 長さ 底面 上端	形態	石材	貯蔵される其他陪葬品						備考	文 獻
										後 新 刀 及 盾 子 箭 束 鎧 甲 盾	○	○	○	○	○		
1	佐賀県(太水市) 下矢井南4	円墳8.6	粘土層	bc表~ bc背			6.0 3.1 1.85	IA2 3		○	○	○	○	○	○	○	4-21 4-22
2	奈良縣御厨町	-					3.4 3.1 2.5	IA2 3	4 5 6								玉杖頭部?
3							5.65 3.0	IA2 3	5 6								27
4	埼玉県桶川市	熊野神社	円 45	粘土層	前期	箱内?	6.1 3.15	IA2 3	5 6								
5							5.5 3.25	IA2 3	5 6	△			○	○			日向丸あれ
6							6.15 3.1	IA2 3	5 6								
7	静岡県静岡市	磐津山	圓門118	磐室	bc表~ bc背					○	○	○					磐手山例に類似
8	岐阜県可児市	白山山古墳	円墳10	粘土層	前期	箱内	6.1 4.1	IA2 3	5 6	○	○						朝名:伊香磐 由古墳
9	三重県上野市	石山	圓門120	粘土層	bc表	箱外		IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		西部
10							7.0 3.0	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
11							6.5 3.1	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
12							5.8 2.7	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
13	奈良県御厨町	磐山	圓門127	磐室	bc後半	箱内?	6.0 3.0 (3.0)	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○	No.16は鏡田	28
14							5.5 2.8	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
15							6.0 3.0	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
16							6.2 3.5	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
17							6.1 2.7 (2.5)	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
18							6.5 4.0	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
19							6.0 3.5	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
20							6.5 3.5	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
21							6.0 3.5	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
22							6.0 3.5	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
23							5.1 3.2	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
24	奈良県五條市	東大寺山	圓門140	粘土層	bc表~ bc背	箱内	6.6 2.65	IA2 3	5 6	●	●	○	○	○	○		31
25	奈良県天理市	上瑞	円墳23	粘土層	bc表~ bc背		2.5 3.0	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○	上部尖頭?	32
26	奈良県奈良市	北極星		bc表		箱内?	5.94 3.21	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○	奈良山古墳 のことか?	33
27	山陰城	-															27
28	和歌山県 中央部	和歌山金塚	粘土層	bc表~ bc背		箱内	6.0 3.0	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
29	大阪府和泉市	和泉貴金塚	圓門35	粘土層	bc表~ bc背	箱内	6.2 3.5	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		31
30							3.1 2.8	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
31	大阪府柏原市	笠ヶ原北塚	円2	粘土層	bc表	箱内?				○	●	●				硝石?	35
32	大阪府高岡市	天王山(1号墳)	圓門71	粘土層	bc中	箱内	7.2 3.6	IA2 3	5 6	○	●	●	●	○	○		36
33							5.5 3.65	IA2 3	5 6	○	●	●	●	○	○		
34	大阪府守口市	若狭島大塚山	圓門163	粘土層	bc表~ bc背	箱内?	6.7 3.2	BH		○	○	○					37
35	大阪府守口市	若狭島5号墳	方8	粘土層	bc生表~ bc生背	箱内?	6.6 3.2	IA2 3	5 6	○	○	○					38
36	岡山県岡山市	金蔵山	圓門165	磐室	bc表~ bc背	室内	3.8 3.8	IA2 3	5 6	○	○	●	●	○	○	破片?	39
37	奈良県桜井市	櫻井青石山	圓門207	磐室	bc表~ bc背	箱内?	4.7 1.0	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○	長持頭?	40
38	奈良県桜井市	メスリ山	圓門230	磐室	bc後半	箱内	10.2 2.6	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○	長持頭?	41
39							9.5 1.3	IA2 3	5 6	○	○	○	○	○	○		
40	奈良県天理市	春木山	圓門105	粘土層	bc表~ bc背					○	○	○	○	○	○	長持頭?	42
41										○	○	○	○	○	○		
42	佐賀県唐津市	佐賀貴金塚														長持頭?	
43	佐賀県	佐賀貴金塚?														長持頭?	
44	佐賀県	佐賀貴金塚?														長持頭?	
45	佐賀県	佐賀貴付道														長持頭?	
46	奈良県	奈良大塚山墓														長持頭?	

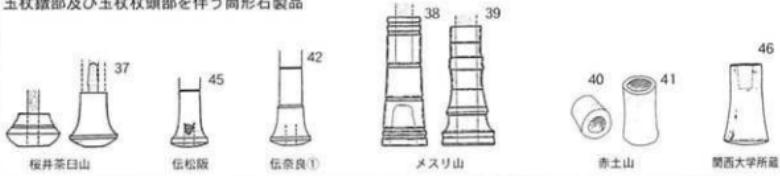
※1: 斜削 - 削竹形木棺、筒形 - 筒形木棺、円 - 圓筒、車 - 車輪形、環 - 環形銅器である。

※2: 例 - 前出外山山古墳、△ - いわてんによるもの、○ - 銀鏡、△ - 銀鏡から著者が計測した数値を指す。

※3: 時期は参考文献等によるが、報告書や文献によって異なっているため、古墳の先後関係の基準にはできない。

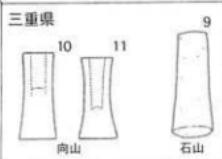
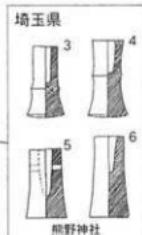
※4: 古墳名は板本で、所在地は奈良県守口市が京都府南丹市とされる。法皇は奈良県守口市物語提供的データによるもので、公式発表された数値ではない。

玉杖鎌部及び玉杖杖頭部を伴う筒形石製品



※1 アミ掛けは筒形石製品及び玉杖鎌部が出土した府県を指している。

※2 赤土山例、スク谷北塚例、加美例、百舌鳥大塚山例、北和城南例、上殿例、石山例は写真から模写した。



第25図 全国の主な筒形石製品及び玉杖鎌部

(2) 鉄斧

鉄斧の特徴 鉄斧は第3号古墳出土(1)と第4号古墳出土(13・14・23・24)の計5点である。全て有袋鉄斧で、24がわずかに肩の張る有肩、その他は無肩である。大きさは長さ6.5~17.4cm、刃部幅4.6~6.0cmで、小型でやや横幅が広い1・24は削りなど加工的な用途、大型で綫長の13・14・23は伐採的な用途が想定される。折り返し両端がやや開く13・14に対し、しっかりと閉じ合せた23・24は袋部と刃部を繋ぎ合せて造った鍛造品と考えられ、造りも精巧である。特に23は他のものよりも比重があり、朝鮮半島製又は朝鮮半島の先進技術が存在する地域で製造された可能性も考えられる。⁽²⁰⁾なお、袋部と刃部を繋ぐ技法は5世紀初頭より出現する有肩鉄斧⁽²¹⁾にみられるものとされ、県内でも5世紀前半に出現している。

県内の類例 県内の主な前・中期古墳から出土した鉄斧は67例である(第11表)。梅本氏によると、県内の無肩有袋鉄斧は小型(全長4.4~8.7cm、刃部幅2.3~5.3cm)と大型(全長10.0~17.3cm、刃部幅4.5~6.1cm)に分かれ、下矢井南例は1が小型、その他が大型である。特に、第4号古墳の無肩鉄斧は全て長さ13cmを超える大きなもので、13・23は県内最大の山王5例(全長19cm)に次ぐ。副葬形態は単数副葬が主流で、1つの埋葬施設に複数副葬を行なった古墳は比較的大型の古墳が多く、副葬品からも有力首長の姿が窺え、鉄斧も全長13cmを超えるものが目立つ。複数の埋葬施設に鉄斧を副葬した古墳は三次市ののみ存在し、同市内に所在する第4号古墳も複数の埋葬施設に複数副葬を行なった唯一の事例である。

重なった鉄斧と鉄鎌 第4号古墳の埋葬施設3では鉄斧に鉄鎌が重なって出土したが、県内でも内堀山例で「鎌→鎌→斧」、沙首例で「斧→鎌→鎌」、禪昌寺西例・池の内・5例で「斧→鎌」、地蔵堂山1例で「鎌→斧」と下から順に重なって出土している。重なっていないものの、城山4例では「斧・鎌・鎌」、宮ノ本21・1例・上安井例では「斧・鎌」、西願寺D・2例では「斧・鎌・刀子・鎌・鑿・鑿」がまとまって出土している。これらをみると、備後では「無肩有袋鉄斧+直刃鎌」となる傾向があり、南部では鎌が含まれるが、北部では他の農工具が含まれていない。

鉄斧の時期 県内の複数副葬された鉄斧をみると、「短冊形+無肩有袋(4世紀前半~後半)」→「無肩有袋+無肩有袋(4世紀前半~5世紀前半)」→「無肩有袋+有肩有袋(5世紀前半~後半)」→「無肩鋤+有袋有肩(5世紀中葉~後半)」→「有肩有袋+有肩有袋(5世紀後半)」と変遷している。下矢井南4例は「無肩有袋+有肩有袋」(23・24)が「無肩有袋+無肩有袋」(13・14)に先行するが、共伴遺物からみて「無肩有袋+無肩有袋」の時期が想定される。

県内の無肩有袋鉄斧の形態をみると、小型のものが古相を示す傾向にあるが、4世紀代にも上安井例(10cm)や西願寺D・2例(13.9cm)が出現し、その後も13cmを超える大型のものが5世紀後半まで確認できる。13・23とほぼ同じ17cmの無肩鉄斧(No.30)や袋部と刃部を繋いだ有肩鉄斧(No.28)を含む亀山例は5世紀前半のものであるが、共伴遺物が第4号古墳よりも新相を示している。袋部と刃部を繋ぐ技法の出現時期や朝鮮半島製である可能性をふまえると、第4号古墳の鉄斧は5世紀初頭を下限とすると考えられ、24は県内の有肩有袋鉄斧では古い部類に入るといえる。後続する第3号古墳の鉄斧は、それ以降の5世紀前半が想定される。

第11表 広島県内の鉄斧を出土した主な前・中期古墳

No.	場所	古墳及び埋葬施設	時期	培形・規模	埋葬施設の内容	鉄斧			主な共伴遺物	備考	文献
						直刃	全長	刃部幅			
1	三次市古吉町	下矢井掛 3	5世紀～前	円10.5	土坑(木棺) ?	有袋・直刃	6.5	1.6	なし		
2	三次市古吉町	下矢井掛 4	4世紀末～5世紀初	円18.8	熱土層(割作)	有袋・直刃	17.4	5.1	劍・刀・矛・槍・鎧	付着した等から理査施設と想定。直刀鍔。	本古
3		下矢井掛 4-3	5世紀初		熱土層(割作)	有袋・直刃	10.3	5.5	劍・刀・矛・槍・鎧		
4					熱土層(割作)	有袋・直刃	17.3	6.0	劍・刀・矛・槍・鎧		
5					熱土層(割作)	有袋・直刃	13.5	4.5	劍・刀・矛・槍・鎧		
6	三次市向山町	墓の本21	5世紀	円13～14.7	箱式石棺	有袋・直刃	7.4	4.2	劍	直刀鍔	46
7		墓の本21	5世紀			有袋・直刃	7.8	4.6	なし		
8	三次市西伯町	四道小屋19-A	5世紀後	円26	土坑	有袋・直刃	8.7	4.0	劍・刀・矛・槍・鎧	遺物は墓坑直上に出土	6
9	三次市西伯町	四道小屋19-C	5世紀前		熱土層(割作)	有袋・直刃	12.2	7.5	劍・刀・矛・鎧	盗掘坑で検出	12
10	三次市西伯町	上四捨貢3	5世紀	方7×8		有袋・直刃	13.1	9.0	劍・刀・矛・槍・鎧		
11	三次市西伯町	上四捨貢6	5世紀後	円17	土坑(木棺)	有袋・直刃	9.8	5.2	劍・刀・矛・槍・鎧	稍外で出土	
12	三次市西伯町	酒屋高塚1	5世紀後	円6.5×4.6	壁穴式石室	有袋・直刃	4.85	2.3	劍・刀・矛・鎧・子	内文帝神歌鏡	47
13	三次市西伯町	船谷寺1	5世紀前	円18.5	石造土塀						8
14	三次市西伯町	船谷寺2-2	5世紀後	壁穴式石室							
15	三次市西伯町	船谷寺2-3	5世紀後	箱式石棺							
16	三次市西伯町	船谷寺2-4	5世紀後	壁穴式石室							-1
17	三次市西伯町	船谷寺11-後方	5世紀後	中間削下	土坑(木棺)				劍・刀・矛・鎧		
18	三次市西伯町	船谷寺12-後方	5世紀後	前削下	箱式石棺				子		
19	庄原市東城町	大泊山1	4世紀中葉	円前-16	壁穴式石室	有袋・直刃	8.2	3.9	劍・刀・矛・鎧・槍・盾	直刀鍔	48
20	庄原市吉田町	曲2	5世紀後～E	円13.5	木棺	有袋・直刃	7.9	5.1	劍・刀・矛・鎧・子・鎧		49
21	財中町中野町	打連山B1	前半期	木棺円18	土坑(木棺)	有袋・直刃	7.15	3.1	劍・鎧	直刀鍔と同様で出土	50
22	福山市須恵町	沙翁2	4世紀前半	円7	土坑(木棺)	變形形	13.1	3.5			
23	福山市須恵町	沙翁2	4世紀前半	円7	土坑(木棺)	有袋・直刃	10.25	3.6	劍・刀・矛・鎧・鎧	株文鏡、直刀鍔、盾と同様で出土	51
24						有袋・直刃	10.15	3.85			
25	福山市須恵町	城山1	古墳初期	木棺9×14	土坑(木棺)	有袋・直刃	7.55	2.3	劍・鎧	直刀鍔と同様で出土	52
26	福山市須恵町	撫邊6	北後半	円16.5	壁穴式石室	有袋・直刃	10.0	4.0	劍		53
27	福山市須恵町	飛越1	4世紀後半	木棺20×10	土坑	變形形	13.5	4.8	なし		54
28						有袋・直刃	15.0	9.0			
29	福山市山辺町	龜山1	5世紀前半	円28	熱土層(割作)	有袋・直刃	11.4	6.2	長・甲・劍・刀・鎧・子・鎧・盾		19
30						有袋・直刃	17	5.6	長・盾・直刀・鎧・盾		
31	庄原市佐代町	中出跡負時3	5世紀	円15	土坑(木棺)	有袋・直刃	6.2	3.5	劍・刀・鎧・盾	破壊	
32	庄原市佐代町	中出跡負時9	5世紀		土坑(木棺)	有袋・直刃	11.1	6.9	なし	墓室直上で出土	55
33	安芸郡大田町	板迫山1	5世紀中頃	円13	土坑(割作)	有袋・直刃	9.3	6.8	劍		56
34	安芸郡大田町	板迫山1	5世紀中頃	円13	土坑(割作)	有袋・直刃	12.5	5.0	劍		56
35	安芸郡大田町	白南山2	中期後	円9	石棺	有袋・直刃	10.0	5.8	なし		57
36	安芸郡大田町	白南山2	中期後	円9	土坑	有袋・直刃	7.9	3.2	なし		58
37	東広島市水呑宿	山王5 SK1	中期	円6	箱式石棺	有袋・直刃	8.0	1.5	なし		23
38	東広島市水呑宿	山王5 SK1	中期	円6	箱式石棺	有袋・直刃	19.0	7.0			59
39	東広島市水呑宿	才が追12	4世紀初	方7.2	壁穴式石室	有袋・直刃	8.2	4.0	劍・盾・鎧		59
40	安芸郡都田町	上安井1	4世紀前	木棺13.5×15	壁穴式石室	有袋・直刃	10.0	5.2	玉・劍・刀・鎧・子・鎧	直刀鍔	60
41	庄原市西瀬戸町	禪慈寺西 C	後半	箱式石棺		有袋・直刃	9.1	4.5	刀・鎧・子・鎧	鍔の下で出土	61
42	庄原市安佐北町	可司御山5 SK1	5世紀前半	12.5	土坑(木棺)	變形形	18.2	5.2	(土器)		62
43	庄原市安佐北町	可司御山6	5世紀～後方	方10?	土坑(割作)	有袋・直刃	10.1	6.1	劍		63
44	庄原市安佐北町	上小田	5世紀中	円25	箱式石棺	有袋・直刃	10.0	6.0	劍・刀・鎧	直刀鍔	64
45	庄原市安佐北町	弘住3	5世紀後～6世紀前	円25	壁室	有袋・直刃	16.0	5.7	劍・刀・鎧	石室上で土師器	65
46	庄原市安佐北町	弘住3	5世紀後～6世紀前	円25	壁室	有袋・直刃	1.1	3.6	鎧・子・盾・鎧		
47						鑄造鉄斧	11.0	9.0	劍		
48	庄原市安佐北町	西頭寺D 1	5世紀前～			有袋・直刃	13.9	5.1			66
49	庄原市安佐北町	西頭寺 D 2	5世紀前			有袋・直刃	11.9	4.9	劍・刀・鎧・盾		
50						有袋・直刃	9.0	3.5			
51						鍛造鉄斧	16.7	4.3			
52	庄原市安佐北町	地藏堂山1	5世紀～後	方7×12	土坑(木棺)	鍛造鉄斧	16.6	4.1	刀・鎧・子・盾・有袋形	有袋鉄斧は鍔の上に重なって出土	67
53						有袋・直刃	11.0±	5.6			
54	庄原市安佐北町	中小田1	4世紀後	圓筒30	壁室	變形形	14.5	5.0	劍・玉・牽縄石		68
55	庄原市安佐北町	中小田2	5世紀後	円15	壁室・本棺	有袋・直刃	8.0	5.3	劍		
56	庄原市安佐北町	中小田2	5世紀後	円15	壁室・本棺	有袋・直刃	6.3	2.8	花・玉・劍・刀・鎧・子・盾・鎧		
57	庄原市安佐北町	虹山1	5世紀～後方	24.0	土坑(割作)	有袋・直刃	8.3	4.3	玉・劍・刀・鎧・子	ガラス小瓶	69
58	庄原市安佐北町	池の内2	5世紀～後方	円28	土坑	有袋・直刃	14.0	5.8	刀・馬頭	木劍	
59	庄原市安佐北町	池の内5	5世紀後		土坑墓群	有袋・直刃	11.0	8.7	劍・刀・子・鎧	鍔と一部重なって出土	70
60	庄原市安佐北町	池の内5	5世紀後		土坑墓群	有袋・直刃	11.3	4.7	劍・刀・子・鎧		
61	庄原市安佐北町	魔豆	5世紀後	円15+		變形形	14.3	4.4	劍・盾	山城造成で破壊	71
62	庄原市安佐北町	魔豆 B	5世紀後		箱式石棺	有袋・直刃	9.1	8.1	刀・鎧・子・盾・鎧・盾	稍外で出土	72
63	庄原市安佐北町	寺山3	5世紀後半	円7～8	箱式石棺	有袋・直刃	11.2	5.0	刀・鎧・子・鎧・盾・鎧		73
64	庄原市佐伯町	城ノ下1	5世紀後半	長円14×21	土坑(割作)	有袋・直刃	3.2	3.0	劍・刀・鎧・子・盾・鎧		74
65	庄原市佐伯町	月見城5	中期後半	円3+	本棺袋2	有袋・直刃	3.9	2.3	玉・甲・劍・刀・鎧・子・鎧		
66	庄原市佐伯町	月見城5	中期後半	円3+	本棺袋2	有袋・直刃	9.0	5.1	劍・刀・盾・石製盾牌		
67	庄原市佐伯町	月見城5	中期後半	円3+	土坑袋	有袋・直刃	11.2	5.6	刀・鎧・盾・鎧		75

※ 略称や表記については、「-」=中間と共通記号とし、その他のは下の通りである。

形態：「横円」=前方削内埴、「逆円」=造出し内削埴、「円」=円埴、「方」=方埴、「長円」=長円埴

全長・刃部幅：「直刀」=直刀鍔

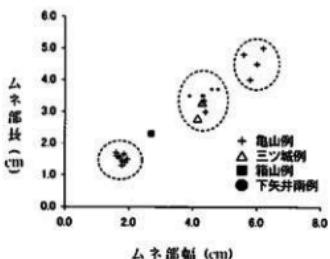
遺物：「土器」=土器、「刀」=刀子、「矛」=矛、「盾」=盾、「鎧」=鎧、「盾牌」=石製盾牌

集成：「に」たてには、各調査報告書のほか、文部省に於ける集成を参考した。

(3) 堅拂

古墳時代の豎櫛 第4号古墳出土の豎櫛は櫛歯を欠損するが、県内では出土例の少ない希少な資料である。豎櫛は調髪よりも髪飾り・髪留めとしての用途を重視した道具とされる。縄文時代早期から登場し、古墳時代に「湾曲結歎式」となって前～中期に盛行するが、後期に入ると現代櫛の祖形である横櫛へ移行・消滅する。構造に地域差や時期差はなく、大半はムネ部に黒漆を塗布して仕上げている。大きさは大量副葬の場合に大型・小型がみられるといわれてきたが、木立雅朗氏は大型・小型・極小型の3分類を提唱した。⁽³¹⁾ 川村雪絵氏は、副葬配置を頭位型・脚位型・棺外型・分散A型(頭位+脚位)・分散B型(頭位+棺外)・分散C型(頭位+脚位+棺外)に分類し、頭位型に全国的な主流をみつも、畿内中心となる棺外型・分散型の分布や古墳以外の遺構での出土状況から、畿内において湾曲結歎式の豎櫛が創出され全国へ流布したと指摘している。⁽³²⁾

県内の竖櫛 図示した竖櫛は埋葬施設1・2・4の各1点、埋葬施設3の4点の計7点であるが、埋葬施設2は共伴した破片から2～3点と想定される。ムネ幅は1.7～4.8cmで、埋葬施設1＝頭位、埋葬施設2～4＝脚位と推測される。県内では古墳5例から竖櫛が出土しており、詳細不明の善法寺1例を除く4例のムネ幅を整理すると、大型＝幅5.8～6.2cm(亀山)、小型＝幅4.3～4.8cm(亀山・三ツ城・下矢井南)、準小型＝幅2.7cm(箱山)、極小型＝幅1.6～1.9cm(亀山・下矢井南)に分かれ、下矢井南例は主流の小型と極小型に該当する。構造は竹ヒゴ6～22本を概ね継糸による一括縛りで束ね、一部は樹皮で巻き付けている。その下に当てる横棒は、残存不良で確認できないものが多い。副葬数は1～17点で、中心被葬者の埋葬施設のみ出土した三ツ城例・箱山例に対し、下矢井南例では墳頂部の埋葬施設全てで出土しており、頭位型・脚位型が併存する点でも例外的である。副葬配置は箱山例・下矢井南例が脚位・頭位型であるのに対し、三ツ城例・亀山例は分散A型である。川村氏は棺外一括副葬品として創出された竖櫛が畿内以外



第26図 広島県出土堅櫛のムネ部寸法

の地域では「大量副葬」という点が重視され、分散型を志向するようになったと指摘している。短甲をはじめ多量の副葬品をもつ龜山例や県内最大の前方後円墳である三ツ城例の様相は、ヤマト王權との強い繋がりをもの語るものといえる。なお、埋葬施設3の堅櫛を重ねた事例は県内ではなく、岡山県久米郡の月の輪古墳⁽³⁹⁾で確認できる。このような副葬形態は脚位や分散型の副葬と共に、単なる墓留めではない祭祀具的な「機

の在り方を示唆するものといえる。

第12表 広島城内の堅櫛を出土した主な古墳

No	所在地	古墳名	時期	陪葬品 規模(枚)	埋葬施設	点数	全木部能定寸法(m)	副葬品	共伴追物						文献							
									長さ	幅	玉	劍	刀	鉢	鏡	神	鏡	子	他の主要遺物			
1	滋賀県高島市	下矢井丹4-1	古墳時代後期	内18.8	箱式石室	1	3.5	3.9		頭位	○											
		下矢井丹4-2			箱式石室	2	~3	1.55	1.7	脚位	○	○			○	○	○	○	○	馬形埴輪	本丸	
		下矢井丹4-3			箱式石室	1	3.35	~4.0	~4.6	脚位	○				○	○	○	○	○			
		下矢井丹4-4			木棺の内板	1	2.4	3.9		脚位												
2	滋賀県近江八幡市	瑞山5-1	前半前半	内11.2	箱式石室	1	2.5	2.7		脚位		○									205	
3	滋賀県近江八幡市	瑞山5-1	前半前半	内8.5	箱式石室	8		?		○	○	○	○	○	○	○						
4	福井県敦賀市	鶴山1	前半前半	内29	箱式石室	17	1.3	~5.0	1.6	~6.2	分散A型	○	○	○	○	○	○	○	○	馬形埴輪	19	
5	福井県敦賀市	三ツ城1-2	中后半	内91	木棺の内板	1	2.8	~3.3	1.5 ~ 1.3	~6.3	分散A型	○	△								馬形埴輪	205

(4) その他の遺物

鉄劍 埋葬施設2出土の2点(5・6), 埋葬施設3出土の1点(10)及び本来は埋葬施設2と推定される盗掘坑出土の1点(22)がある。大きさが近い県内の鉄劍を参考にすると、6は約23cm, 10は60~65cm, 22は約50cmの全長が見込まれ、禹在柄氏の分類で6は広茎の短剣、10は短茎・広茎の小剣、22は広茎の小剣と推定される。

鉄刀 埋葬施設1出土の1点(3)及び本来は埋葬施設2と推定される盗掘坑出土の1点(21)で、共に直刀である。3は全長30~40cmと推定される短刀で、直線的に並びつつも刃先の向きが違えた出土状態に人為的な処置が窺え、清家章氏のいう「破断鉄器」である可能性が高い。21は県内の長刀に共通する刃側の片闇で、茎部の長さからみて「長刀」の可能性が高い。県内の長刀は茎部の5~6倍ほどの全長となる傾向があり、全長57~68cmと推定される。

鉄鎌 埋葬施設2出土の1点(7)と埋葬施設3出土の1点(11)は小~中型の直刀鎌で、着柄角度から7は古瀬清秀氏の分類でいうIA類、11はIIA類に比定できる。県内出土の直刀鎌は大振りな小型や中型のI類がほとんどで、11は県内では希少な事例といえる。

4 副葬品の組成と頭位

(1) 副葬品の組成

埋葬施設1~4は豎櫛を共通副葬品とし、埋葬施設4を除く3基に「刀劍類」、埋葬施設2・3に「刀劍類+農工具(斧+鎌+刀子)」の共通組成がみられる。県内の鉄斧副葬古墳で「斧+鎌+刀子」の組成を含む11例も、全てに刀劍類が伴うことから「農工具(斧+鎌+刀子)+刀劍類」というセット関係が窺え、5世紀前半以降の古墳は鉄鎌が共伴している。次に、埋葬施設2では鉄劍と鉄刀が共伴するが、県内の鉄刀・鉄劍共伴古墳19例のうち、善法寺1例・亀山1例・中小田2例が「斧+鎌+刀子」の組成を含む。特に、前2者は豎櫛副葬を行なった粘土櫛を有する大型円墳で、下矢井南4例に様相が近い。なお、豎櫛副葬古墳では善法寺例・亀山例・箱山例で下矢井南4例にない鉄鎌が共伴しており、三ツ城例でも併設埋葬施設で鉄鎌が副葬されている。

(2) 副葬品の配置と頭位

埋葬施設1~4は比較的等間隔で並び、主軸方位が大きくずれることから統一された頭位が想定される。豎櫛のもつ祭祀的要素をふまえ、他の副葬品から頭位を考えてみたい。

盗掘坑の影響がほとんどない埋葬施設3では、墓坑南小口付近に鉄斧・直刀鎌、北小口付近に鉄斧・刀子と共に「L」字状を成して刃先を北西に向けた長剣が置かれていた。無肩有袋鉄斧と直刀鎌の共伴事例は頭位副葬の傾向があり、長剣の刃先方向も刃先を足位に向ける県内の傾向に合致することから、墓坑底面の傾斜に準じた南東頭位が妥当である。埋葬施設1は短刀が破断鉄器の可能性があり、破断鉄器に類似する「折り曲げ鉄器」は全国的に頭位副葬が多い。県内の短刀や折り曲げ鉄器も頭位副葬が多くみられることから、墓坑傾斜に準じた南東頭位が想定できる。埋葬施設2も、短剣の刃先が埋葬施設3と同じ北側を指すことや北西に傾斜した底面から南東頭位が類推でき、墳頂部の埋葬施設は南東に共通頭位をもったものと考えられる。

5 古墳群の特徴と時期

(1) 埋葬施設及び古墳群の構築順

第4号古墳の埋葬施設5基は、墳頂部における配置や副葬品の様相からB群→A群と順次構築されたといえる。B群内では埋葬施設2がより中央に位置し、遺物内容でも埋葬施設3を優越しており、当被葬者が古墳構築の契機となったと思われる。その後は「複数鉄斧+鎌+刀子」の副葬品組成を継承した埋葬施設3、これと小口形態が共通する埋葬施設1と続き、最後に堅櫛のみを副葬した埋葬施設4が構築されたと考えられる。埋葬施設5は離れた配置や状況から従属葬の可能性が高く、埋葬施設2と同時またはそれ以降に構築されたものと考えられる。

古墳の構築順は土層観察では確認できなかったが、立地や第4号古墳を中心とした群形態からみて、規模や副葬品から主墳とみられる第4号古墳が古墳群構造の契機となったと考えられる。これに続く第3号古墳と第5号古墳は離れた立地や第5号古墳に遺物がなかったことから先後関係を明らかにしがたいが、墳丘構築が「第4号古墳→第3号古墳→第5号古墳」と簡略化する流れが窺えるため、「第3号古墳→第5号古墳」の順で構築されたと推測される。隣接した群形態をふまえると、第3号古墳と第5号古墳には第4号古墳被葬者の地縁的・血縁的関係者が葬られた可能性が高い。

(2) 古墳群の造営時期

第4号古墳と墳丘の規模や構造が類似する馬洗川下流の三次市向江田町・権現第2号古墳や三次市域の15m以上の大型円墳における粘土櫛の出現・盛行の時期は5世紀前半である。堅櫛副葬古墳の中で墳丘規模や埋葬施設、副葬品組成が極めて近い様相を見せる善法寺例や龜山例も、5世紀前半の造営とされる。ただし、第4号古墳は副葬品に鉄鎌を含まない点や直刃鎌であることから、これら2例に先行するものとみられ、袋部と刀部を繋ぐ鉄斧技法が登場する5世紀初頭を中心とした築造が想定される。また、精巧な鉄斧が朝鮮半島製の可能性も含むことや和泉黄金塚古墳や金蔵山古墳に類似した様相(筒形石製品の形態、副葬品組成)、4世紀代を上限に含む「無肩有袋鉄斧と直刃鎌」を共伴する古墳や無肩有袋鉄斧を複数副葬した古墳の時期幅をふまえると、4世紀末まで遡る可能性がある。後続する第3・5号古墳は第4号古墳と墳丘構造が類似し、大きな石材が散乱していない状態から堅穴系の埋葬施設が想定され、第4号古墳との極端な時期差は考えられず、概ね5世紀前半を中心にして造成されたと推定される。

(3) 下矢井南第4号古墳の被葬者像

第4号古墳に副葬された鉄斧は県内でも大型のもので、特に埋葬施設2の無肩鉄斧は精巧なものである。鉄斧を複数副葬した埋葬施設を複数有する古墳は県内になく、使い古した鉄斧と直刃鎌を副葬するなど農工具を重用した様相から、矢井川流域を開拓した被葬者の姿が想像される。農工具に共伴する複数の刀剣類は、「武具」よりも「威信財」や「呪術的道具」としての副葬を感じさせる。これは被葬者の司祭者的側面を強調するものであり、墳頂部の被葬者たちに連鎖と副葬された堅櫛は、埋葬施設2に葬られた中心被葬者との近親的関係を示す象徴的遺物であったと考えられる。

矢井川に面した丘陵上には下矢井南古墳群以外に矢野中山古墳群・中山古墳群が存在し、矢井川に合流する沼田川上流域にも単独又は2基の群構成で存在する古墳や前方後円墳1基（海田原第21号古墳）が確認できる。これらには大型古墳を含む八幡山古墳群・三玉古墳群・海田原古墳群などのように馬洗川流域を意識した立地は窺えず、むしろ馬洗川の氾濫を避け、馬洗川西側丘陵の裏側を流れる矢井川・沼田川沿いの狭長な谷底平野を生活環境とした人々がいたものとみられる。第4号古墳の被葬者は、このような小河川流域を治めた中小首長であったと考えられ、筒形石製品のような威儀具的遺物を入手した経緯は興味深い。この経緯を探る上で注目されるのが、馬洗川下流域に所在する宮の本第24号古墳である。直径30mの大型円墳で、3段築成の墳丘に石を葺くと共に100本近い円筒埴輪を樹立しており、ここを発信源にヤマト王権による埴輪祭式が馬洗川流域に広まったと考えられている。⁽¹⁾ この古墳も4世紀末の築造とされており、第4号古墳から出土した筒形石製品や精巧な鉄斧は、ほぼ同じ時期に馬洗川上流の吉舎町内においてもヤマト王権との関わりがあったことをもの語る遺物と考えられる。吉舎町内は大型古墳が帆立貝形古墳となる三次盆地の特性が強くみられる地域で、中期以降より馬洗川を望む丘陵上に大型古墳を中心とした多くの古墳群が構築されている。その背景にはヤマト王権による軍事編成との関わりがあるといわれ、⁽²⁾ 町内最大の帆立貝形古墳である三玉第1号古墳は墳丘の様相や短甲をはじめとする多量の副葬品から、ヤマト王権と結びついた軍事的な被葬者が想定されている。副葬品の1つである筒形銅器は、筒形石製品との関わりが指摘される希少な遺物で、4世紀中葉に築造された前方後円墳（全長46m）である庄原市・大迫山第1号古墳や下矢井南第4号古墳と様相が類似する龜山第1号古墳でも出土している。⁽³⁾ 三玉第1号古墳の被葬者と下矢井南第4号古墳の被葬者の接点は時期的に考えられないが、共に特殊な遺物が副葬された点に連絡とした地域とヤマト王権の繋がりが窺える。

註

- (1) 財團法人広島県教育事業団『年報8 平成22年度』 2012年
- (2) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 権現第1～3号古墳』 2010年
- (3) 参考文献27に同じ。
- (4) 参考文献47に同じ。
- (5) 参考文献10に同じ。
- (6) 本村豪堂『備後三次市太郎丸古墳調査報告』『古代藝術』第4集 1961年
- (7) 広島県神石町教育委員会 広島大学文学部考古学研究室『辰の口古墳』 1996年
- (8) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『浅谷山東B地点遺跡 清水3号遺跡』 1998年
- (9) 参考文献10に同じ。
- (10) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『五反田第1・2号古墳発掘調査報告書』 1985年
- (11) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『大判・上定・岐山』 1987年
- (12) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡』 2012年
- (13) 吉舎町教育委員会『坂東古墳』 1995年
- (14) 参考文献1に同じ。
- (15) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『植松遺跡群』 1987年
- (16) 参考文献1に同じ。

- (17) 参考文献10に同じ。
- (18) 参考文献12に同じ。
- (19) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『石鏡権現古墳群発掘調査報告』 1981年
- (20) 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1) 大畠 奥池第1～3・7号古墳』 2010年
- (21) 服部聰志「大塚古墳の埋葬施設について」『祇津豊中 大塚古墳』 1987年
- (22) 国林孝作「木棺の諸形態」『古墳時代の考古学3 墳丘構造と葬送祭祀』 同成社 2011年
- (23) 参考文献50に同じ。
- (24) 広島県教育委員会『石鏡権現古墳群発掘調査報告(第9・10号古墳)』 1982年
- (25) ~ (28) 鈴木裕明「附論 前期後半期における威儀具の形象」『櫛原考古学研究所特別展図録第58冊 政権交代』 桜原考古学研究所附属博物館 2002年
- (29) このほか、赤土山側の1つもやや短小な形状が窺える。
- (30) 調査指導員である古瀬清秀氏(広島大学文学部教授)の御教示による。
- (31) 野島水「古墳時代の有袋鉄斧をめぐって」『考古学研究』41巻第4号 考古学研究会 1995年
- (32) 参考文献46の「まとめ」に記載。
- (33) 県内には他にも鉄斧・鉄鎌が共伴した事例があるが、まとまって出土していないものや出土状況が不明なものは除外した。
- (34) 亀田博「堅拂」「末永雅雄先生米寿記念献呈論文集」乾 末永先生米寿記念会 1985年
- (35) 木立雅則「木製拂の変遷とその意義について」『野本道跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1993年
- (36) 川村吉繪「古墳時代の堅拂」『國家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』 大阪大学考古学研究室 1999年
- (37) 亀山側は「頭位=大型+桶小型」「脚位・短甲内=小型」と規格で配置を分けた分散A型である。
- (38) 註36に同じ。
- (39) 月の輪古墳刊行会『月の輪古墳』 1960年
- (40) 馬在柄「鉄劍の型式学的研究」『國家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』 大阪大学考古学研究室 1999年
- (41) 清家草「破碎副葬と葬送祭祀」『古墳時代の考古学』3 同成社 2011年
- (42) 古瀬清秀「農工具」『古墳時代の研究』8 雄山閣出版 1991年
- (43) 県内の鉄刀・鉄劍共伴古墳20例は、第11 表記載の下矢井南側、善法寺1・8・11例、大迫山側、亀山側、曲例、上小田側、中小田2例のほか、三次市の川西第1号古墳・四拾貫太郎丸第2号古墳・八幡山第24号古墳・三玉第1号古墳、庄原市の中央山第2号古墳、福山市の池下山第1号古墳、三原市の大谷第8号古墳、安芸区の丸子古墳、安佐北区の三王原古墳・地蔵堂山第2号古墳、東区の須賀谷第1号古墳である。
- (44) 註41に同じ。
- (45) 参考文献46の「まとめ」に記載。
- (46) 古瀬清秀「古墳時代における備後北部の特質・特に三次盆地を中心に」『古備の考古学的研究(下)』 山陽新聞社 1992年

参考文献

- 1 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『寺津古墳群』『荒坂ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(1) 1994年
- 2 河瀬正利・向田裕祐『从三郡三良坂町植松第1号古墳発掘調査報告』『芸編』第3集 芸術友の会 1975年
- 3 三次市教育委員会『大仙大平山第21・22号古墳』 2000年
- 4 広島県『広島県史』芳文社 1979年
- 5 佐崎寿和・常楽寺古墳群調査報告『広島県双三郡・三次市史料總覧』第1編 1956年
- 6 四拾貫小原発掘調査『第1号古墳』『四拾貫小原』 1969年
- 7 三次市教育委員会『三次市四拾貫小原第3号古墳発掘調査概報』 1971年
- 8 広島縣双三郡三次市史料總覧編纂委員会『広島縣双三郡三次市史料總覧』第5編 1975年
- 9 註6及び中国新聞社編『古代散策－広島県北の道路を訪ねて－』青文社 1987年
- 10 広島県教育委員会『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979年
- 11 花園古墳群発掘調査『花園古墳群』 1976年
- 12 広島県教育委員会『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年
- 13 府中市教育委員会『府道遊跡群一府中市元町土地区画整理事業(桜ヶ丘圃地造成)に伴う発掘調査報告』 2001年
- 14 新市町教育委員会『新市町立歴史民俗資料館「汐音・後池』 1996年

- 15 広島県教育委員会 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「石跡山古墳群」 1981年
- 16 福山城博物館「ふくやまの古墳時代－古代の「くらし」と「美」の世界－」 2005年
- 17 広島県教育委員会「呉市駅前家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1976年
- 18 村上正名「山古墳」神辺町教育委員会 1965年
- 19 広島県教育委員会「亀山道路－第2次調査概報－」 1983年
- 20 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(VI) 1991年
- 21 参考文献 18及び村上正名「編後芦田川下流域の古墳群」「古代吉備」第3集 1959年
- 22 広島県教育委員会「福島古墳」 1973年
- 23 豊栄町教育委員会「山王4・5・6号古墳」 1994年
- 24 財團法人東広島市文化振興事業団「蛇追第1～4号古墳・蛇追道路発掘調査報告書」 2005年
- 25 広島県教育委員会「福島古墳跡群発掘調査報告」 1982年
- 26 財團法人広島市歴史科学教育事業団「倉重山古道跡」 1991年
- 27 村井富雄「福岡市谷原野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』第41巻第3号 1956年
- 28 佐野大和「古墳出土の木」『大和文化研究』第3巻第6号 1955年
- 29 三重県埋蔵文化財センター「石山古墳」第24回三重県埋蔵文化財展図録 2005年
- 30 奈良県教育委員会「斎跡千塚古墳群 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊」 1981年
- 31 東大寺古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館「東大寺山古墳の研究」 2010年
- 32 奈良県教育委員会「小泉一塚原・大塚古墳、勢野一茶臼山古墳、和通一上塚古墳 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第23冊」 1977年
- 33 井口高輔「東和城南古墳出土品(奈良国立博物館蔵)」『鹿鳴推集』第6号 奈良国立博物館 2004年
- 34 末永雅雄・鳥田曉・森浩一「和泉黄金塚古墳」 1954年
- 35 北條芳隆・浦宜田佳男編「考古資料大観」第9巻 小学館 2002年
- 36 大阪府教育委員会「弁天山古墳群の調査」大阪府文化財調査報告第17輯 1967年
- 37 大阪府「大阪府史」第1巻古代編 1978年
　　堺市博物館「特別展 墓発掘物語－古墳と遺跡から見た堺の歴史－」展示図録 2001年
- 38 参考文献35及び財團法人大阪市文化財研究所「大阪市の文化財」 1989年
- 39 西谷直介・鈴木義昌「金剛山古墳」 財團法人立教考古館 1959年
- 40 奈良県教育委員会「桜井茶臼山古墳 鷺附山古墳 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊」 1961年
- 41 奈良県教育委員会「スリ山古墳 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊」 1977年
- 42 奈良県立園原考古学研究所附属博物館「櫛原考古学研究所特別展図録第58回 政權交代」 2002年
- 43 米田文季「石製品」「古墳時代の研究」第8巻 雄山閣出版 1991年
- 44 関西大学博物館「関西大学博物館叢書 本山彦一蒐集資料目録」 2010年
- 45 大塚初重・小林三郎・熊野正也編「日本古墳大辞典」東京堂出版 1989年
　　大塚初重・小林三郎編「続日本古墳大辞典」東京堂出版 2002年
- 46 財團法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(29) 宮の本第20～26・31・32号古墳」 2013年
- 47 広島県教育委員会「月星高原古墳」 1983年
- 48 広島県東城町教育委員会 広島大学文学部考古学研究室「広島県比婆郡東城町 大迫山第1号古墳埋蔵発掘調査概報」 1989年
- 49 財團法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 曲第2～5号古墳」 2011年
- 50 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「内堀山遺跡群A・B地点」 1997年
- 51 新市町「新市町史」資料編 2002年
- 52 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山－新市地区土地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－」 1996年
- 53 拝道古墳調査(「編後掛迫古墳」「芸能文化」第5・6合併号) 1956年
- 54 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「長迫道路発掘調査報告」 1982年
- 55 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「院ノ神道路群 中出勝負姫埴原群」 1986年
- 56 広島県教育委員会「中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(3) 1982年
- 57 吉田町・吉田町教育委員会・吉田町開発公社「高田郡吉田町 日南山古墳の発掘調査」 1974年
- 58 八千代町教育委員会「新宮道路発掘調査報告書」 2000年
- 59 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(区) 1993年
- 60 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター「上安井古墳発掘調査報告書」 2001年
- 61 神吉寺西道路発掘調査(「神吉寺西道路発掘調査報告」) 1980年
- 62 広島県教育委員会 株式会社アコード「可部寺山第5号古墳・可部寺山2号道路発掘調査報告書」 2004年
- 63 財團法人広島県教育事業団「寺山古墳」 2004年
- 64 本村豪章「広島県安佐郡高陽町小田古墳調査報告」「広島考古研究」第二号 広島考古学会 1960年
- 65 広島県教育委員会「弘佐道路発掘調査報告」 1983年
- 66 広島県教育委員会「西瀬戸道路群」 1974年
- 67 広島県教育委員会「高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1997年
- 68 広島県教育委員会 広島大学文学部考古学研究室「中小田古墳群」 1980年

- 69 紅山古墳発掘調査団『紅山古墳発掘調査報告』 1989年
- 70 広島市教育委員会『池の内遺跡発掘調査報告』 1985年
- 71 広島県教育委員会『尾曾城跡発掘調査報告』 1984年
- 72 広島市教育委員会『九郎杖遺跡・梶地遺跡発掘調査報告』 1984年
- 73 財團法人広島市歴史科学教育事業団『寺山遺跡発掘調査報告』 1997年
- 74 財團法人広島市歴史科学教育事業団『城ノ下A地点遺跡発掘調査報告』 1991年
- 75 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』 1987年
- 76 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(33) 箱山第3～6号古墳』 2014年
- 77 広島県教育委員会『三ツ城古墳』 1954年



a 古墳群全景（東上空から）



b 古墳群全景（北上空から）



c 古墳群全景（真上から）



a 第3号古墳調査前全景
(東から)



b 同上全景 (東から)



c 同上盜掘坑 (北西から)



a 第3号古墳全景（北から）



b 同上埴丘盛土土層
(北から)



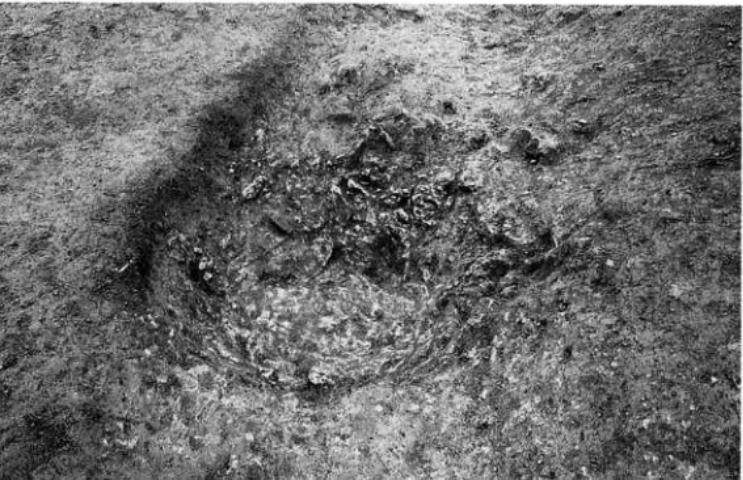
c 同上埴丘盛土完掘状況
(北から)



a 第3号古墳SK1検出状況
(北から)



b 同上土層(北から)



c 同上完掘状況(北から)

a 第3号古墳SK2
検出状況（北東から）



b 同上土層（北東から）



c 同上完掘状況（北東から）

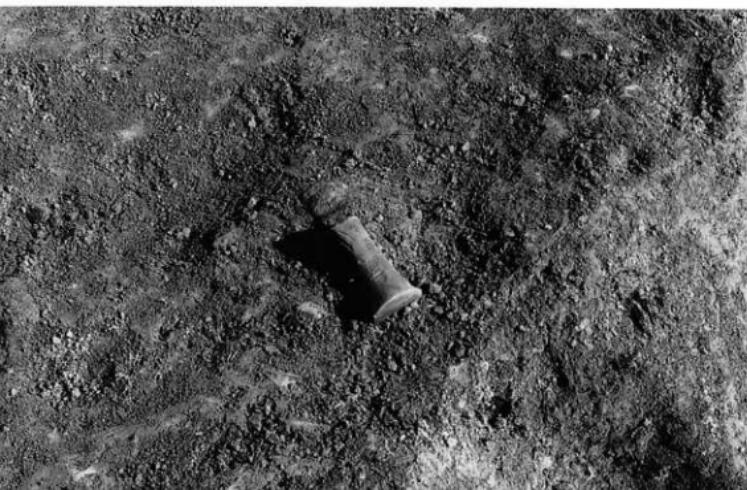




a 第4号古墳調査前全景
(南西から)



b 同上全景 (西から)



c 簡形石製品出土状況
(南西から)



a 第4号古墳全景
(南西から)



b 同上埴丘盛土土層
(南西から)



c 同上埴丘盛土完掘状況
(南西から)



a 第4号古墳墳丘土層
(南北方向北半、東から)



b 同上 (南北方向南半、
西から)



c 同上 (東西方向東半、
北から)



d 同上 (東西方向西半、
南から)

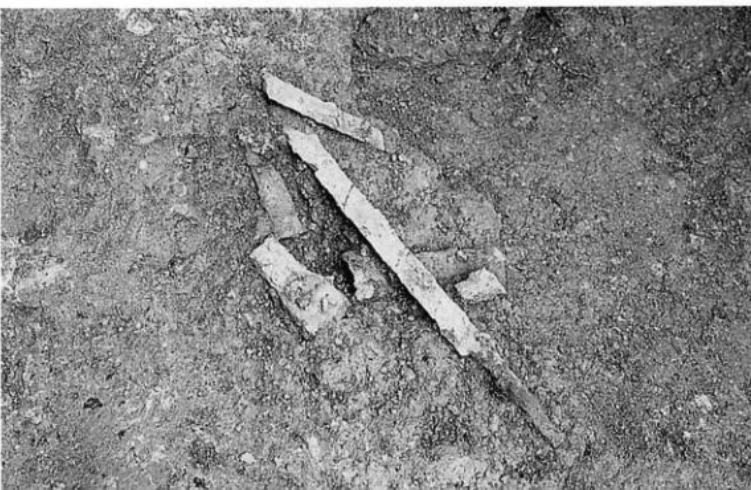
a 第4号古墳盗掘坑
検出状況（南西から）



b 同上完掘状況（南西から）



c 同上遺物出土状況
(北西から)





a 第4号古墳埋葬施設1
粘土検出状況（北西から）



b 同上遺物出土状況
(北西から)

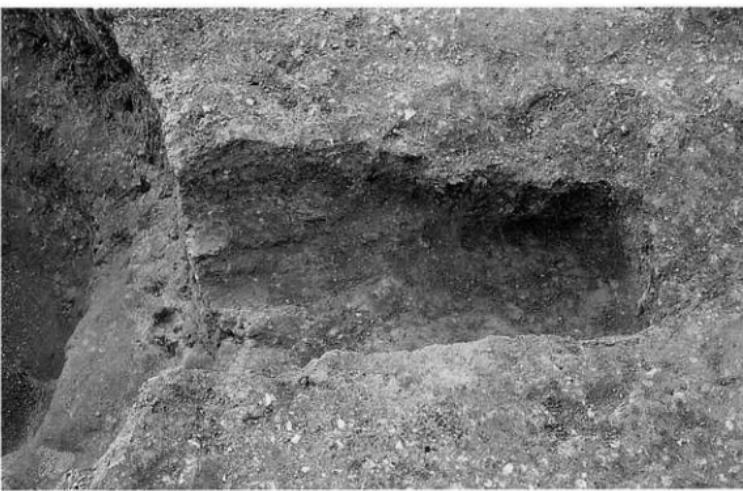


c 同上完掘状況
(北西から)

a 第4号古墳埋葬施設1
遺物出土状況（西から）



b 第4号古墳埋葬施設2
粘土検出状況（北東から）



c 同上遺物出土状況
(北東から)





a 第4号古墳埋葬施設 3
粘土検出状況（北西から）



b 同上遺物出土状況
(北西から)

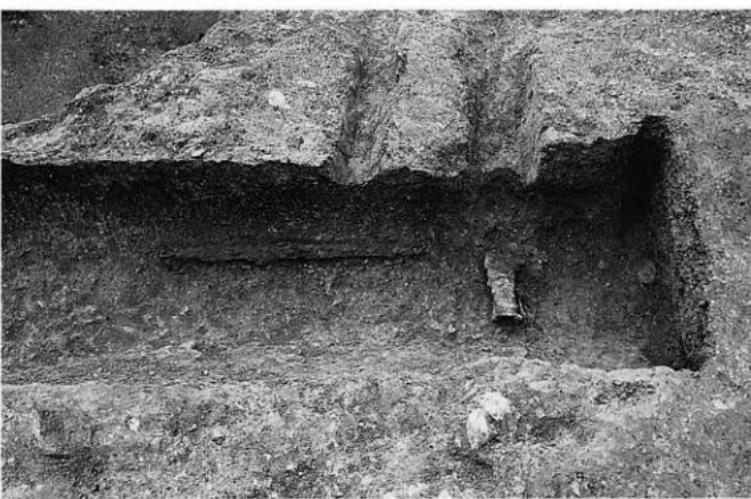


c 同上遺物出土状況
(南西から)

a 第4号古墳埋葬施設3
遺物出土状況（北西から）



b 同上遺物出土状況
(北東から)

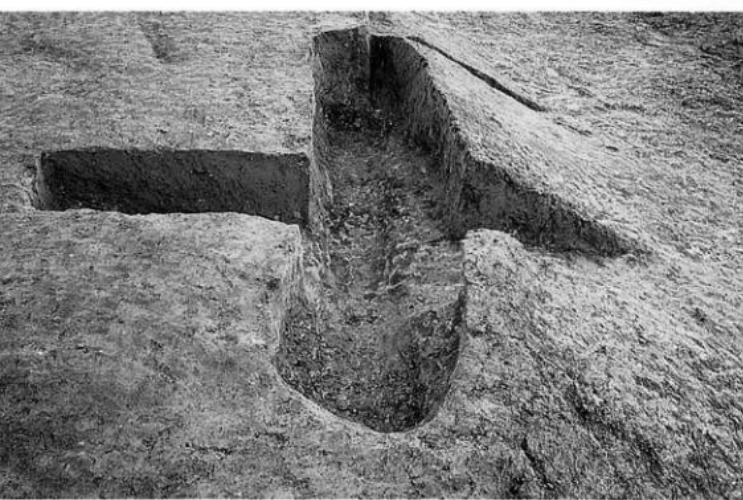


c 同上完掘状況（北西から）





a 第4号古墳埋葬施設4
遺物出土状況（南から）



b 第4号古墳埋葬施設5
完掘状況（北から）



c 同上完掘状況（西から）

a 第5号古墳調査前全景
(南西から)



b 同上全景 (南西から)



c 同上埴丘盛土完掘状況
(南西から)



第3号古墳周溝



第4号古墳填丘



第4号古墳埋葬施設1



第4号古墳埋葬施設2



第4号古墳埋葬施設3



第4号古墳埋葬施設3



13

第4号古墳盗掘坑



23



14



24

第4号古墳埋葬施設4



19

21

22



20

調査区内



26



27



25

報告書抄録

財團法人広島県教育事業団発掘調査報告書第 62 集

中国横断自動車道尾道松江線建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (34)

下矢井南第 3 ~ 5 号古墳

発行日 平成 26 (2014) 年 3 月 24 日

編 集 公益財團法人 広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室
〒 733-0036 広島市西区観音新町四丁目 8 番 48 号

TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3051

発 行 公益財團法人広島県教育事業団
印刷所 朝日精版印刷 株式会社